

九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学

生涯学習研究センター紀要

第22号

目 次

■総 説■			
農業経営の持続可能性についての一事例 —生涯学習と地域振興—	牛島史彦	1	
■原著論文■			
上海海洋大学における中国文化体験プログラム —生涯学習における中国人学生と日本人学生の相互学習—	荻原桂子 黄冬柏	9	
小児交互性片麻痺患者への家族支援に関する現状と課題	松本禎明	21	
九州共立大学リコンディショニングルームにおける 医療機関との連携方法の現状と課題	粟谷健礼 篠原純司 辰見康剛 中村奈菜	29	
フラッグフットボール日本代表チームにおける運動能力測定の実践的研究	粟谷健礼 永田聡典	35	
2015年度リコンディショニングルームにおける活動報告と今後に向けて	辰見康剛 篠原純司 粟谷健礼 中村奈菜	41	

2017年

農業経営の持続可能性についての一事例
— 生涯学習と地域振興 —

牛島 史彦
九州女子大学共通教育機構教授

キーワード：農業経営 後継者 経営の持続 相続 地域振興

A Case of Continuation possibility for Farm management
— Lifelong learning and Local promotion —

Fumihiko USHIJIMA
Profesor, Division of General Education, Kyusyu Womens University

ABSTRACT

Awareness of a management subject and self-controlled growth enable to continue and success of management. And awareness and self-controlled growth depended on rational reflection to an experience, not an idea and spirit.

Key word: farm management, successor,
continuity of management, succession, local promotion

はじめに

本稿は、農業経営の「持続可能性」について、相続・継承実態の聞き書きを整理したものである。聞き書きに応じて下さったのは、福岡市郊外のベッドタウンの或る農家、A家の当主B氏とその父親（本稿では「先代」と表記）で、時期は2004～2009年に夫々数回～10回ほど、1回1時間半から2時間程度を費やした。世間話や互いに私的な内容に立ち入った、いわゆる「脱線」も交えての聞き書きであり、調査項目が記載された質問用紙を手にした一方的なアンケート調査ではなく、むしろそのような雑談をとおして徐々に筆者の聞き書き「調査」への関心や発問が湧き上がってくるような、質的調査における聞き書きであった。

このような、一種の信頼関係による「緩い」会話を通して、両者の間には農家の相続や継承の実態に関する回顧談や説明、そしてそれに対する筆者（調査者）の解釈や理解が蓄積されていったが、筆者の解釈や理解については聞き書きからなるべく日をおかない間に文字化して最小限の整理作業を施したものを話し手に郵送し、筆者の誤解がないかを確認して頂いた。このような確認の手続きも広義の会話としての「調査」であるが、調査される事項・事象の記憶や体験の「持ち主」は、調査者ではなく話し手（被調査者）であり、彼らにはそれについての理解や解釈が適正か否かを誰よりも早く判断する権限があると考える限り不可欠だと考える。

冒頭で本稿は「聞き書きを整理したものである」と断ったのも、本稿が半ば調査者の持ち物である生の録音やメモをもとにしたのではなく、両者の「共有物としての聞き書き直後の整理メモを」を材料にして、本稿の趣旨に沿って再整理したという意味である。

さて、以下は本誌第21号の拙稿「柳田民俗学の町おこし」の「はじめに」でも触れた問題提起であるが、いわゆる地域振興や「町おこし」に際しては、地域の人・町の人が振興努力の主体者の自覚をもっておくことが必要であり、そのための「学び」という教程を軽視した地域振興事業や「町おこし」活動の「持続可能性」や成功の可能性は高くないのではなかろうか。

本稿の目的は、まずは経営主体の自覚や自律的な成長が経営の成功と持続を可能にした事例を提示することである。次に、そのような自覚や自律的成長は、理念や精神ではなく体験への合理的な省察に拠ったものであることを示すことである。

1. 営農の実態

A家が営農している福岡市郊外のベッドタウンは、かつては福博地域の需要に応じた野菜と蜜柑類の産地だった。そのうちA家の主な耕地は、50aを野菜、50aを毎年耕すだけで作付けはしない「素畑（すばたけ）」、40aを水田、17aで蜜柑。20aを市の公園用地、30aを市役所の駐車場として貸与。15aに11件の借家を建てている。

1970～71年頃に公団アパート用地として田の一部を売却して蜜柑山を買ったが、収益の面で旨みがなくなりこれを売って畑を買った。それから、ハウス苺が10a反だったのを水田50aも苺作に転換して30aの用地に苺ハウスを建てた。これは20数年前のことで10aで2百万の出荷金額だったのが多い年には650万円に増えた。品種「豊の香」の導入によるが、技術的にはあまり難しくないのでの収量が多いという。大正期から1970年頃まで胡瓜が主力の野菜と温州蜜柑の産地だったこの一帯は、70年代を境にして住宅・市街地と高収益のハウス苺に両極化した感もある。

現在の当主のB氏によると、苺は氏が小学校の高学年の頃、先代が冬場の収入源として始めたものだという。出荷の最盛期になると、毎朝妻が6時頃に朝食づくり、母は6時半頃から家の門口で売る野菜などを準備する。7時になると、出勤する勤め人が買って行くが、娘もその時分に出かけてゆく。

先代と自分もその頃に朝食を摂るが、この季節は朝食は各自ばらばらになる。それから両親は野菜の畑、自分は苺のハウスに行くが、3人でハウスに行くことも多い。9時半か10時頃に摘んで帰宅し、昼食を挟んで3時か4時ころまでパック詰め。これは2度に冷蔵しておいて翌日の昼、高速道路のインター近くの農協苺部会の市に持って行く。繁忙期には6時頃から摘んで夕方6時頃まで妻も加わってパック詰めをやる。

家族の役割分担は固定したものではなく融通性がある。もっとも、両親は畑の野菜。妻が米の注文受けと配達という点では固定的な面もある。野菜の畑は以前は蜜柑山だった土地だが、冬場も父は3回ほどトラクターで耕耘する。歳を取ると仕事がおおざっぱになるので、代かきは自分がやるが、野菜は両親でないと分からない。これは細かな手が掛かるためでもある。妻は家事や子供の世話。父はたまに外出等々、分担は各自忙しくこなしているが2夫婦の4人で3人役と、多少の余裕はある。不動産収入のお陰で、これが1人役の感じである。これがなかったら全員が農事に追われて消耗してしまうだろうという。

この先代の語るA家の敗戦後—高度経済成長期から80年代にかけての営農の変遷の概要は、現在のハウス苺は前述のように総合計で約30a。当時までは主な収入源だった水田の一部を、1970年の区画整理事業で道路や緑地など公共地に提供し、残りを稲の苗床と菜園にした以外は1985年に近隣でも初の試みとしてハウス苺に転換したのが最大の画期である。

苺ハウスの面積15a、これに20tの堆肥を入れる。堆肥は、隣町の養鶏農場の鶏糞を買ってきて、かつて郊外に買った山林・畑の一角に積み上げてフォークリフトで籾殻と混ぜ、1年使った後のハウスのビニールで覆って4年間、土と変わらぬくらいに熟成させる。ハウスの場合、日光や風雨の分解・風化が無いので「施肥」というより、こうした有機物を「客土」する発想であり、田畑の農業とは違うという。他の農業と違うといえば、ビニールも1年で透明度が減じて苺の色が悪くなるので2年は使わないという。

苺について一帯で卓越する作物（特産物）は蜜柑であるが、これは敗戦後の1949～50年頃に20aの山林を拓いて苗木を植えたが、90年代中頃に前述のように市の公園用地として貸している。残りの蜜柑山は1966年に当時の住宅公園に売却したが、蜜柑樹を伐採する伐採補償金で向こう10年分の蜜柑収入が支払われたので自宅の近隣に15aの土地を購入して借家を建てた。

現在での意識や自覚の面で営農の主軸である水田作は、JR沿線から離れて市街地化や工業団地とは比較的縁の薄い内陸部で行われているが、元々は80aだったのが前述した公園への売却の補償金で約18aを取得してさらに3年後に25aを買い足した。この年には隣町の水田45aも購入したので、敗戦後のA家は父子2世代2夫婦で約1.7の水田を耕作する比較的に大きな農家として営農が持続されている。

2. 2世代2夫婦の役割分担

A家の農作の主な役割分担は、稲作と蜜柑（温州）が当主で販売（直販）及び家事が嫁、野菜は先代（父）、苺は全員であたっている。野菜については、聞き書きの当時は未だ40歳代だった当主が、野菜は他の農作の合間を縫って晩種、出荷時期を見極めて育苗—定植—施肥と水遣り—出荷等々、見通しが複雑で今の自分には無理と脱帽していた。また販売はJAではなく米と同様に直販であり、これは苺摘みなど繁忙期を除いて自宅の門の脇で無人販売。3～5月は西瓜、瓜、トマト、胡瓜など夏野菜が主である。採れた端から袋詰めして100円～200円で門口販売。手取りは夏季で月に5～6万円、JA経由の3倍で年間4～50万になる年もあるという。

苺作の手取りは、小売価300円サイズのパックだと240～250円、700円のだと450円。苺は、も

とも隣海岸部の町村から始まって高度経済成長期に輸送流通網が完備してから一帯の本格的な特産物になった。80年代以降の市街地化で激減しているものの、先駆者・草分けとしてまとまった規模で作付けしているA家は今でもこれを継続してJAの苺部会に出荷している。

鮮魚同様に鮮度が問われる苺の作付けは、6月になると育苗を始めるが、あらかじめ冷蔵庫に入れて花芽をつけさせる。こうして準備した苗を8月～9月下旬に苗床から移して定植。10月15日前後からビニールかけの作業で、ハウス苺として11月上旬～5月末まで収穫作業が続く。苺は開花後30日で収穫できるという。

ハウス内は肥料分を濃くして苗を肥らせるが、苗の蔓が伸びたら切って挿芽をして増やす。この段階では未だビニールはかけず余計な花芽は摘み取ってゆく。収穫の4～5月は繁忙期で、A家では働き手4人で総がかり。6時には起きて昼前までパック詰め。昼から出荷するが、+3度の予冷庫に入れて翌日出荷することもある。

水稲作の分担は、田植機、トラクター、コンバインなど機械の操作は自分が担当するので、コメ作りは主に自分の役割だが、2～3日おきの「水廻り」はむしろ父のほうがまめに廻ってくれる。また、田植えも田植機の操作は自分だが、トラックにコンテナを積み込んだり、またコンバインの届かない隅の部分鎌で刈り取る等、細々した作業や手間が在るので、これは全員で分担する。10aあたり「8～9俵」取れるが、熱心な農家だと10俵取るだろう。しかし、手間や疲労度の割に差が1俵、米1俵の出荷価格を考えると、手間は苺などほかの作業にかけるほうが良い。

当主のB氏によると、営農の主力として機械オペレーターは自分で、家族全員年令に応じた仕事があるのが農家の特色だという。亡くなった祖父も苺の段ボール箱の組み立て等々、80超して手伝っていた。水田の除草は、今の薬は便利で一回散布して田面が乾かないように水に気を付けておくと生えてこない。苗代は苺ハウスのそばの田圃。10aあたり苗のコンテナ20枚。全部で320～350枚用意する。10aあたり2.5キロの種籾を蒔く。籾は、原種専門の農家が県の二日市試験場の近くの吉敷のあたりにあってそこから購入している。ただし、2～3年は保つので4年目で購入するが、それ以上だと変異が始まるという。

2～3年間は、出来の良かった田圃の一部を種子籾用に収穫して塩水で出来不出来を選別した後に消毒。こういう種子の選別や苗代の管理は細かくて面倒なので父はやらない。同年輩で後継者の居ない人は勿論やっているが、一人前の息子が居る父は手を出さず、隠居を決め込んで野菜づくりを主な仕事にしている。これは営農の責任だけでなく農作の段取りや流れを管理する責任を逃れた気楽さだと思う。

米の直販と配達を分担する嫁の実家は兼業農家だった。一般に兼業農家は、平日は男の働き手が居ないので意外に農作業が忙しい。当主によると、嫁は銀行務めで農業は未経験であり、その父親が当主が専業農家として農事に専念してくれるのなら、という条件を出したという。勿論、今では農家の嫁として一通りの農事は分担できるようになっている。

3. 継承・相続の経緯

1957年生まれのB氏は、50代までは「後継者」と呼ばれていたことが少し不満だったという。

軽く10組以上の仲人役をつとめてきた先代によると、農家の倅も30歳を越えると嫁は無理。若いうちから嫁探しをすること。当主は、後継者の確保のためにもその頃には将来の経営の見通しをつけておかねばならない。規模的に二世代で分担して働かねば成り立たないので、24～5歳で嫁を取ること。したがって高学歴は営農に不可欠のものではないという。

氏が中学3年で進学・進路指導のとき、担任が仮に農家を継ぐのなら農業高校だということで、その

まま納得したという。進路の迷いや跡を継ぐことの悩みは自覚しなかった。というのも、氏の父親(先代)は農業を苦にしている姿を見せず、「ばからしい」「きついばかり」といった弱音を吐かず、いつも前向きに取り組んでおり、そのような姿に影響されたのだろうというが、すでに当時は農家の跡取りを望む生徒は2割も居なかったようである。

1975年に農業高校を卒業して農水省果樹試験場養成研修科に合格・進学した。まだ柑橘類、とくに温州蜜柑の全盛時代で長崎県の口之津支場で受験したが、一度に15人程しか採らず施設も建て替え中というので1年目は神奈川県平塚(現、つくば市)の本場へまわされた。東日本のそこは常緑の柑橘ではなく落葉の梨、桃、リンゴ、ブドウなど広く教わった。現場では直接役に立つものではなかったが、交友が広がったのが財産である。九州出身の同期生は県内に5人。この人たちとはかつては年1回、各々の近くの旅館に泊まりがけで集まることにしていた。皆バリバリの専業農家で経営規模や作付けは夫々だが、話を聞けばどれだけ大変か分かるので大きな刺激になったという。

当時、国の試験場へ行くというのは農業後継者としては最高レベルだった。受験は難しく、国語、数学、農業関係もあったと思う。自分の高校からは2~3人だけで、福農からは2~3人だけで進学校からの受験生もいた。

2年間の課程を修了すると、今では4大卒になったが県の農業改良普及員の受験資格が貰えた。しかし20才で帰郷して実際の農事は何も分からず、まだ40歳代の元気盛りだった父親から怒られ追い回される日々が続いた。その父親は、隠居を決めると農家の講習会や研修などパッと引いて全て自分に譲った。農事も基本的に自由にさせてくれ失敗しても文句をいわなかった。この引き際は本当に見事だったと思う。

23才で結婚したが、相手は高校時代の1学年先輩の妹だった。農家を継いでからこの先輩に妹のことを聞いて見合いをした。当時の界限は都市化が進んでおり、農家も周辺地区から不動産収入などの面で羨ましがられていたという。

同世代の後継者の親睦研修制度は、A家で蜜柑園を持っている隣の郡には後継者が多いのだが、交流事業は郡単位なので彼らとは交流は少ない。もちろん、自分の町にも後継者連絡協議会があって後継者30代を中心に14~15人が会員である。自分は40代に入ってから「後継者」ではなく経営当事者・当主の自覚があった。嫁さんは自由恋愛が殆どで2~3人は関西や他県からのUターンだが、20代が居ない点が自分の子どもに農家を継がせることを迷う一番の理由である。

営農の仲間はほんとに大切だと思う。行政のほうも、以前は自分たち専業だけに目を向けて顕彰したり援助したりしていたが、農村全体は兼業農家の田畑の中に専業が点在しているわけで、用水や農道の管理、防除など多数派の兼業が居ないと専業だけで農村全体の耕地や営農施設を維持することはできないという

次に、先代の継承・相続の経緯であるが、その前にA家の現在の業態を決めた画期について述べておきたい。1972~73年頃まで工事が続いた住宅公団の分譲宅地の造成であるが、この開発にかかる山林の所有者10何軒かで先代を中心に反対運動をやったという。これは当時の農家・地権者は営農の持続について疑ったこともなく、そのためにより有利な代替地を確保して農業を続ける意思であり、補償金を得て現実問題として農業を辞めることは殆ど考えなかったという。団地の公園や道路など、開発による減歩が各戸3~4割も提供したが、道路のかかりや用水の整備など、営農の面でそれ以上の得があった。

このような「堅い農家」である先代は、1944年に国民学校をおえて農学校に進学した。15歳で卒業したときに父親は3回目の応召(1943~47年)しており、農家としてのA家は祖父母が守っていた。40歳で復員したときに祖父は69才、自分は15才だったという。

1955年に23才で結婚したが、農家は跡取りとして結婚しても相続しない限り従業員・作業員に過

ぎないことが身に沁みた。養鶏は1953年頃に始めたと思う。これが59～60年以降は3千羽を越していた。64～65年の頃、自分が32～3才で父は57～58歳だったが、兄弟が5人いてうち3人が学校に通っており、父は家計を分けて子どもたちを通学させることに決めて父が養鶏、自分が農業を分擔するようになった。

1968年頃だったか、63～4才になっていた先代の父は7百万を投資して養鶏の規模を拡大することを飼料会社から奨められた。この会社が養鶏用地を担保に7百万円、空気圧で飼料を送る設備を提供するという。当時は限界の農地は10a 大体450万円しており可能ではあったが自分は大反対した。「もう何歳になるか。先は永くないだろう」と父を説き伏せたという。足繁く立ち寄って世間話をしていたセールスが途端に寄りつかなくなった。

自分としては、父から長期の借金まで相続したくはなかった。また他に蜜柑が儲かっていたせいもあるが、案の定というかじきにアメリカから「液卵」が輸入されだしてマヨネーズやカステラ原料となり、国内の卵価は2年ほどで暴落した。この会社は、多数の農家からこうして担保に取った土地で、今では不動産経営をしている。これは住宅公団とのやり取りにつぐA家の画期だったと考えている。

この項の三番目の記述として、このような典型的農家である先代の農家人生について述べて次項に繋ぎたい。敗戦のとき、A家の経営規模は水田2.5ha、畑は1.5ha（蜜柑1ha、野菜0.5ha）。人手は父母、先代、この地域ではオナゴシ（女衆）と呼ばれていた住み込みの農業手伝いの未婚女性が2人（A家では1957年まで雇用）。そして祖父母だった。ただし自分が嫁を貰ってからは祖父母はあまり田畑に出なくなった。

父が応召したので人手が足りず、水田1haを小作に貸していたが、先代が農学校を15才で卒業する前に祖父が頼んで返して貰っていたのは幸いだった。もっとも、この幸運は敗戦後に嫁いできた先代の奥さんには辛いことだった。当時のA家は、水田はすべて菜種を1.5ha 麦を1ha 裏作していた。春の麦と菜種の収穫に続く田植えと、秋の稲刈りに続く麦、菜種の作付けは、幼児を抱える農家の嫁には非常に辛い時期だった。奥さんは、刈りで新婚当初の妻が姑から「はか」がいけないのを小言いわれて泣いていたことを述懐する。

日本のいわゆる小農的家族経営で、年間労働時間のピークがこの時期に集中することの緩和策が農作改良の技術的・経営的課題であることはいうまでもないことだが、関連して先代は小学校3～4年の頃、朝鮮半島の若者たちが住み込みで働いていたのを憶えているという。彼らは慶尚南道の出身で敗戦後2～3年で帰国したが、日本人の親方が2～30人ずつ下関に連れてきていたという話で、農家はこの親方に賃金を払い若者たちは只働きだったという。

当時の稲の品種は、自家用に早稲も作っていたことを憶えている。収量は少ないものの、前年の飯米が無くなる頃に採れるので10～20aは作っていた。田植えの日取りは家毎にばらばらだったが、敗戦後は6月の下旬から月末で終えて7月1日が部落中がヨコイ（休養日）という取り決めだった。

前述の慶尚南道の若者たちが帰国した敗戦後は、代わりに福岡県八女、長崎県壱岐、熊本県西部の天草や南部の人吉などからオトコシ、オンナシ（男衆、女衆）を1年契約の住み込みで頼んでいた。独身男女で、食事その他一切、家の青年たちとまったく同じ扱いだった。格差をつけると帰郷した後悪い評判を立てられ、翌年から来てくれなくなるので気を使った。A家では、1947年から2人、10年間も同じ娘さんが続けてくれた。ところが、1952～53年になると、自分も人吉まで募集に出向いたことがあるが確保が難しくなった。若者たちは都会に出るようになり、入れ替わり堅いA家でも耕耘機を買った。当時は、田んぼの近い農家3軒で割り勘の共同であり、代かき前、稲刈り後、裏作の畝立て、裏作の収穫後に耕耘した。

この時期、50年代後半以降は耕耘機が軒並み普及し、家の中には家電が増え始め、先代等の若者たちは親にねだった大型バイクで博多に繰り出すのが楽しみだったという。農業が儲かり農村が最も

栄えた時期だといえそうである。

しかし、1960年代後半になると、とくに前述の公団の団地造成で農地の買収が始まると、農家の意識が違ってきたという。また、新住民が入ってきて新風が吹き始め、農家の跡取りも賃稼ぎや商売などに転向する者が出始めた。さらに、麦の輸入が自由化され、菜種油が輸入のコーン油に代替されて裏作が赤字になり、1970年頃から米の過剰生産で水田の減反政策が始まったのが追い打ちになった。

これに対応して、A家のような篤農家で中規模以上の田畑を有する農家は苺、胡瓜、茄子など手間と技術を注いで価格の高い作物に転換した。この野菜作の技術や経験は、もともと博多・福岡の郊外、市場的には直方や飯塚も出荷圏内に入る一帯に定着した旧くからのものだったという。

4. 先代の「農家訓」

先代の父も祖父も長男だったが、長男が農家の跡取りとして家屋敷や田畑山林を相続してきた。弟や女兄弟にも分けてやるため相続の度に田畑山林は細っていた。代々A家は、その減った分を稼いで買い足す一生だった。父は1947年に「分家」を出し、祖父は25年にこの家を新築して翌年「分家」している。自分は1997年に父親が亡くなり、翌年に相続したが税を6千万円徴集された。先代は息子（B氏）の相続税を案じていた。

敗戦後、この町の農家は40余軒あったが、現在も後継者が居る専業農家は10軒程か、残りの30余軒は跡継ぎを勤め人にしたり農地を潰してマンションを建てたり、後々まで農家としての財産を残す家は少ないだろう。その点で、同世代の仲間は悔やむ者も居るが、とって今でも営農しているA家での農作業のきつさ、農業の馬鹿らしさは今も昔も変わるものでもないという。

先代によると、敗戦直後の頃は農学校の卒業生でも跡を継がず県庁の農政部や食糧事務所に就職する同窓生が増えていた。しかし、現在の彼等は厚生年金だけはついているが、農作を止めて役所を勤めあげた末の退職金は子どもの大学進学や結婚、クルマの買い換え、家の建て替えや補修などで3年ほどで使い果たし、年金だけの暮らしという例も多い。勤続30年間で農家としての家産はいつのまにか無くなっている。

しかし農家を続けていると、年金は僅かだが結果的に家産は残ることになる。むしろ、家産を残すための家業が農家ということだろう。農家と勤め人は両立しにくい。自分は、こういう同窓生や伯父たちを見ていて、祖父の口癖「白ぎもん着るな、バツジ着けるな」というのに納得してきた。白ぎもん（白い着物）は恐らく農事試験場などの白衣の技師。バツジは町会議員などであろう。この町では、資産家でも議員3期つとめると家は潰れている。町長も同様。商売を始めるのも成功例が少ないという。

相続に際して農業に見切りをつける農家も多いが、マンションなど建設費をローンにした場合は、一時繰り延べとして相続対象の資産から外すことができ、相続税は節税になるが、代わりに減価償却は認められないので3世代目への相続の際に新築換算で課税されるのだという。

今では、昔の仲間の1割くらいしか専業農家は居なくなった。農家は自分の代で楽をしようと止めてしまったら、次の代は土地を無くした只の人になり、リスクに満ちた別の苦勞が始まる。先代は、うちは代々、少しづつ楽をしようと思っているという。

まとめ

先代の祖父は、孫のB氏（先代の長男）については「真面目な子に育てろ」「勉強など中位で良い」というのが口癖だった。これも「白ぎもん」の教訓でありA家の家訓でもあろうが、これを農家の経営理念として活かしたかに見える先代の言を再び引用しておこう。

「若いうちから嫁探しをすること。当主は、後継者の確保のためにもその頃には将来の経営の見通しをつけておかねばならない。規模的に二世代で分担して働かねば成り立たないので、24～5歳で嫁を取る。したがって高学歴は営農に不可欠のものではない」

先代は、すでに収入をあてにしなくなった山の温州蜜柑園を売って、自宅の向かいの古い借家敷地800㎡を解体しアパート経営でもするか、などと聞き書きの当時は話しておられた。いずれにしてもB氏の子どもたちが成人する頃の見通しは立っている。A家は2代続けて男子は1人であるが、先代は孫（B氏の長男）には出来たら九大農学部に進ませたいとも願っている。

新しい技術や業態を採り入れながらも旧来の経営を堅持して資金を蓄積し、必要な時を見極めて大胆な変革を断行する労力と出費をいとわない。まさに「云うは易し」の代表的な経営訓のひとつと思われるが、王道のひとつであることは否定できない。高学歴を否定するのも、農業経営には有益ではないからである。

学校教育の可能性を否定しているわけではないことは、孫には大学農学部をという抱負からも伺われる。学校教育や社会教育での学習は、全き人生のための選択的な手段であることを理解している点で、高学歴だけでは必ずしも獲得不能の「知性と教養」が感じられるようである。

地域振興「町おこし」のための生涯学習は、このような「埋もれた人材」を、例えば町おこしのための人的資源として再発見し、虚心にその「知性と教養」に学ぶことだと考える。

上海海洋大学における中国文化体験プログラム
—生涯学習における中国人学生と日本人学生の相互学習—

荻原 桂子

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間基礎学専攻教授

黄 冬柏

九州共立大学経済学部教授

**Chinese cultural experience program
at Shanghai Ocean University
—Mutual Learning of Chinese Students and
Japanese Students as The Lifelong Learning Activity—**

Keiko OGIHARA.

Professor, Course of Principal Human Sciences, Department of Human
Development, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University

HUANG DONG BAI

Department of Economics and Business Administration, Faculty of Economics,
Kyushu Kyoritsu University

Lifelong Learning Activity, Japanese-Language Education

ABSTRACT

Japanese language education is necessary not only for foreigners but for Japanese people as well. I am reminded of how much there is to know about Japanese when I read Japanese from a foreigner's viewpoint. Japanese people may think that they do not need to continue learning Japanese since it is their own native language. That is wrong. In the modern era of computers and globalization, knowledge of Japanese language is increasingly needed. I have considered about Japanese for lifelong learning not only as one whose native language is Japanese but based on my practical experience of mutual learning between Japanese students and Chinese students of Japanese as a foreign language. When the Japanese student reads Japanese along with a Chinese student learning Japanese, they discover a lot about their own native language. The Japanese student's understanding of Japanese grows while supporting the Chinese student's Japanese language education.

はじめに

福原学園海外協定校である上海海洋大学からの提案をうけ、「上海海洋大学における中国文化体験プログラム」が、2016年8月28日（日）～9月3日（土）に実施された。経営企画本部国際交流・留学生支援室が九州女子大学・九州共立大学から参加希望の学生を募集し、両大学参加者への説明会を行った。日本人学生にとって、中国語や中国文化を体験できる有意義なプログラムである。

生涯学習における中国人学生と日本人学生の相互学習について考えるうえで、語用論的転移¹⁾を深く理解することは大切である。日常言語能力は自国で学習することができるが、認知学習言語能力は外国文化のなかで外国人と交わりながらでないと身につかない。この認知学習言語能力は、相手の文化への興味や実利があるほうが伸びやすい。自国で学んだ言語能力（文法・語彙・発音）を基礎として、現地の外国人と交わることで談話能力を伸ばし、実際の文化に触れることで社会言語能力を育むことができる。

谷口すみ子氏は言語学習について、「第二言語を学習する目的とは、異なる文化・社会においても、自分が自分であるために、生活を確立し、自分の人となりをも的確に伝えることのできることを使って、周りの人たちと協働的な関係を作っていくことではないか²⁾」と指摘している。つまり、第二言語を学習するということは、自分の生活を支えてきた母語以外の言語で未知の人々と新しい関係を切り開いていくための「手段」だといえる。外国語学習の目的は単に言語を学習することにあるのではなく、言語をとおして自分と未知なる世界の間をつなぐためといえる。すなわち「外国語を学習するということは、言語に関する知識を覚えて使えるようになるということだけでなく、それ以外の領域でもなんらかの変化を引き起こす³⁾」というのである。その言語をとりまくさまざまな生活や文化や人間について、さらに自国の生活や文化や人間との比較における差異について考えをめぐらすことになるのである。ここに、異文化理解・人間理解すなわち他者への関心がふくらむことになる。他者への関心とはコミュニケーションの原点である。最近取りあげられることの多いコミュニケーション力とは、他者への関心と深い関係がある。現代の過剰な情報化には、内側にこもる情報にばかり関心がいつて活きた他者への理解・関心が害われている傾向がある。

海外の日本研究として、いま注目されているのは、マンガやアニメやゲームソフトといった日本のポップ・カルチャーである。日本のサブ・カルチャーに興味を持っている中国人学生と中国文化に関心のある日本人学生が相互に学習し、交流の機会をもつことは、グローバル化社会にとって重要な体験となるに違いない。日本人学生は、内にこもるのではなく積極的に外にでて日本人の習慣や日本の文化について語ることが大切だと考える。

今回、海外協定校の上海海洋大学における中国体験プログラムを実施するにあたって、国際交流・留学生支援室長黒木隆善准教授、同室事務担当沈若氷氏と引率教員（黄・荻原）で事前打ち合わせ（7月28日）があり、中国語担当方如偉教授と沈氏による事前研修（7月30日）を行った。参加学生と引率教員との顔合わせ（8月5日）では海外での学生の安全行動について指導し、参加者心得の注意および研修の目的を確認した。注意事項の最終確認と現地での緊急時連絡網で不測の事態に備える準備も徹底して行われ、公用携帯電話および上海海洋大学関係者への手土産等も周到に用意された。

1. 上海海洋大学における中国文化体験プログラムについて

本プログラムの目的は、本学園の海外協定校である上海海洋大学を訪問して在學生と交流しながら中国文化を体験すると同時に、国際都市上海を体験することで現代中国について学ぶことである。第二外国語習得には、動機づけを高めるということが重要である。外国語を学ぶことによって異文化交

流し、学習している言語を話す人々の文化に関心を持つことが大切である。中国語が実際に使用されている現地に行き、その文化に直接触れるために、九州女子大学6名と九州共立大学7名の合計13名が参加した(表1)。

表1 上海海洋大学における中国文化体験プログラム参加学生

	九州女子大学	九州共立大学		合計
	女性	女性	男性	
1年	3	0	2	5
2年	0	1	1	2
3年	1	0	0	1
4年	2	0	3	5
合計	6	1	6	13

本プログラムは、協定校である上海海洋大学外事所所長鍾俊生教授、上海海洋大学外国語学院日本語学部部長劉軍教授、同じく副主任周艶紅先生が企画し、本学国際交流・留学生支援室長黒木隆善准教授、同じく担当沈若氷氏が実施にむけて準備し、教員(黄・荻原)が学生を引率した。上海海洋大学での受け入れ態勢は完璧で、日本人学生に対応してくれた日本語科学生も夏期休暇にもかかわらず全面協力的であった。本学でも、国際交流・留学生支援室による事前研修および緊急時態勢に万全を期した。協定校である上海海洋大学と本学が一体となって本プログラムに取り組んだのである。日本人学生は中国語学習の成果を発揮するものであり、中国人学生は日本人に中国語を教え、自国の文化や歴史を説明するというまさに相互体験学習となった。宿泊施設は、上海海洋大学構内の研究生交流センターを使用させていただいた。研究生が夏期休暇中のため空室になっている部屋で、ベッド・机・シャワー室・エアコンが完備されている。食事は大学構内の第三食堂で食券を使って各自注文し、中国人学生に交じって和気あいあいと会食した。本プログラムの日程および主な活動内容をまとめた(表2)。



写真1 上海海洋大学の学生

8月28日(日)13時40分、福岡空港国際線ターミナルに集合し、出発前の注意事項を確認し、定刻出発した。上海到着後、浦東空港混雑のため入国審査に時間をとり教員2名、学生13名が到着ゲートを出たのは、18時30分であった。予定より2時間遅れたにもかかわらず、ロビーで待っていてくれた上海海洋大学日本語科3年の学生3名は笑顔で迎えてくれた(写真1)。

表2 上海海洋大学中国文化体験プログラム
(2016年8月28日～9月3日)

月日	時間	活動	場所
8月28日 (日)	13:40 15:40 16:25 (現地) 20:00～ 20:30～	福岡空港集合 福岡空港発 (CA916便) (大学バス) 上海浦東空港着⇒上海海洋大学 オリエンテーション 夕食	国際線ターミナル 研究生交流センター 海天楼
8月29日 (月)	7:00～8:30 9:00 9:30～11:30 11:30～ 14:00～17:00 17:30～	朝食 ロビー集合 開講式、中国楽器鑑賞 昼食 (大学バス) 南匯嘴公園見学、滴水湖散策 夕食	第三食堂 研究生交流センター 日語実訓室 第三食堂 第三食堂
8月30日 (火)	7:00～8:30 9:00 14:00～15:30 16:00～	朝食 ロビー集合 (大学バス) 東方明珠タワー、上海民族博物館見学 昼食 (正大広場) 上海サーカス城 豫園散策、バンド夜景見学 (大学バス)	第三食堂 研究生交流センター
8月31日 (水)	7:00～8:30 9:00 14:00～16:30 17:00～	朝食 ロビー集合 卓球大会 (日本語科学生との交流) 武術体験 昼食 中国結び・切り絵体験 夕食	第三食堂 研究生交流センター 体育室 第三食堂 日語実訓室 第三食堂
9月1日 (木)	7:00～8:00 8:00	朝食 ロビー集合 (大学バス) 上海ディズニーランドにて昼食、夕食	第三食堂 研究生交流センター
9月2日 (金)	7:00～8:30 9:00 10:30～ 17:00～	朝食 振り返り・アンケート・閉会式 餃子大会、午後は自由時間 夕食	第三食堂 日語実訓室 第一食堂 第三食堂
9月3日 (土)	7:00～8:30 9:00 12:10 (現地) 14:40	朝食 ロビー集合 (大学バス) 上海浦東空港発 (CA915便) 福岡空港着、解散	第三食堂 研究生交流センター 国際線ターミナル

2. 上海海洋大学における中国文化体験プログラムの実施内容

上海海洋大学の大学バスで、3名の中国人学生を加えた18名で、研修先に向かった。到着したのが予定より2時間以上遅れた20時前であったにもかかわらず、上海海洋大学の先生方は待っていてくださり、簡単なオリエンテーションのあと夕食会となった(写真2)。鍾先生、劉先生、周先生が歓迎の挨拶をされ、本学引率教員と日本人学生が挨拶した。その後、大学構内にある研究生交流センターにもどり、各自就寝した。



写真2 海天楼において

8月29日(月)7時からセンターの前にある第三食堂で前日配布された食券を使って各自朝食をとった。上海海洋大学構内には3つの食堂があり、全寮制の学生が3食摂れるようになっている。朝食メニューにはゆで卵、豆乳、揚げパン、白粥などがあり、果物や飲み物は別に売店で購入できる。9時にロビーに集合し、宿舎から歩いて日語実訓室に移動し、開講式を行った。本プログラムに関する生活・研修オリエンテーションを実施した。その後、劉軍先生が横笛(写真3)を、黄春玉先生が二胡(写真4)の演奏を披露してくださった。中国の楽器の美しい音色に皆うっとりした。



写真3 劉軍先生の横笛演奏



写真4 黄春玉先生の二胡演奏



写真5 研究生交流センター前

昼食は、中国人学生と日本人学生と一緒に第三食堂で食券を使って、各自注文してコミュニケーションをとりながら会食した。本学での学食の風景と同じで、学生同士話がはずんでいた。午後は大学バスで、南匯嘴公園を見学し、滴水湖を散策した。宿泊地である研究生交流センターから学外に移動するときは、いつも大学バスが待機していてどこに行くにも快適であった(写真5)。

上海海洋大学の学生は夏期休暇中にもかかわらず、常に5、6名の学生が案内をしてくれた。学内では先生方が中心になってプログラムを進行していたが、

学外の行事は全て日本語科の学生に任せていて、先生と学生の信頼関係が素晴らしかった。日頃の御指導が行き届いているからこそ、学生主体でも行事が滞りなく進行できるのだと先生方の御指導には頭が下がる思いだった。日本語科の学生の日本語力は素晴らしく、日本人学生とすぐに打ち解けて年来の友人のように意気投合して、盛り上がっていた。

8月30日（火）9時にロビーに集合し、中国人学生5名と日本人学生13名および引率教員2名が大学バスで、浦東エリアのランドマークである「東方明珠タワー」（写真6）「上海民族博物館」（写真7）を見学した。



写真6 東方明珠タワー



写真7 上海民族博物館

正大広場では中国人学生に教わりながら日本人学生も、ファーストフードショップでハンバーガーの中身を指差し、ソースおよびトッピングを注文し、「トウショーチェン」（いくら？）と言って会計をした。

周先生が予約してくださった最高席でサーカスを鑑賞した。本物の馬、熊、虎、オウムが登場し、大迫力であった（写真8）。上海でサーカスが見られるとは思っていなかったので大いに盛り上がった。周先生には、今回のプログラムで大変細かいところまで心遣いいただき感謝の気持ちでいっぱいである。



写真8 上海サーカス城

学内での行事と学外での行事を順番に計画し、大学バスを随時手配して外国での夏期の暑さに疲れなように配慮していただいた。

その後、大学バスで豫園へ移動した。日本人学生は、中国の歴史的建造物に感動した様子で、散策中には豫園名物の小籠包をテイクアウトした。また、日本人学生4、5名にチューターとして中国人学生1名が案内してくれたことで、豫園のなかを自由に歩くことができ、買物もどこのお店が安いかなどと相談しながら、街に溶け込んで生き活きと活動することができた（写真9）。



写真9 豫園



写真10 卓球大会

8月31日（水）午前中は大学内体育館で、「卓球大会」「武術交流」を行った。中国人学生もスポーツが得意な学生が新たに加わった。

卓球大会では、中国人学生の卓球名人と九州共立大学スポーツ学部の学生が対決し激戦となった。勝ち負けは問題ではなく、お互いの力を出し合うことを心から楽しんでいた。音楽やスポーツは、世界共通の言語であり国境を越えて楽しめるということが実感できた（写真10）。



写真11 武術交流

場所を変えて、武術交流は武術の専門家を招き、みんなで指導を受けた。スローにみえて、ハードなポーズや素早い動きが要求され、筋肉が悲鳴をあげていたようである（写真11）。日本にも武術はあるが、中国拳法は映画でしか見たことがなかったので、見様見真似で真剣に取り組んだ。中国人学生と一緒に、日本人学生も汗だくになって習得しようとしていた。ポーズが決まると、みんなで拍手して爆笑した。



写真12 中国結び

研究生交流センターにもどり、第三食堂で中国人学生と日本人学生で楽しそうに昼食をとっている様子が微笑ましかった。午後は、日本語科3年の学生との交流会ということで、新たに3人の中国人学生が加わり、「赤い中国結び」「切り絵」を体験した。「中国結び」はなかなか難しく、講師の先生に何度も手取り足取りで教わった。この活動は手作業なので、体で習得でき中国体験に有効であった（写真12）。

9月1日（木）早めに学生食堂で朝食をとり、上海海洋大学のバスで、本年6月にできたばかりの「上海ディズニーランド」へ移動した（写真13）。平日にもかかわらず満員で、日本人学生4～5名に中国人学生1名が入り、グループでアトラクションを走り回っていた。中国人学生がスマートフォンで待ち時間やアトラクションの情報を得て、日本人学生と相談しながら計画的に行動していたようである。引率教員は、さすがに若い学生についていけず、暑さのなかでへたばっていた。



写真13 上海ディズニーランド



写真14 上海ディズニーランド夜景

最後の花火の打ち上げを観たいという日本人学生の要望をかなえていただき、閉園の21時までディズニーランドにいて大学バスで帰った。中国人学生も寮なので最後までつきあってくれた。日本人学生にとって、一生忘れられない光景となったに違いない。広大な敷地で迷子になる学生がでなかったことは、中国人学生がしっかりサポートしてくれたおかげである（写真14）。

9月2日（金）9時から日語実訓室で「閉講式」が行われた。劉軍先生が、今回のプログラムの振り返りを行い、日本人学生一人一人が反省や感想を述べた。中国人学生は、流暢な日本語で感想を述べてくれた。7日間朝から夜まで、誠心誠意自分たちにつきあってくれた中国人学生には、日本人学生も心から感謝するとともに、言葉や文化は違っても通じるものがあるということを実感し、親近感をもったようである（写真15）。



写真15 閉会式後



写真16 餃子大会

午後は、第一食堂に移動して、「餃子大会」を開催していただいた。餃子の皮を粉から練るという本格的な料理で、周先生が準備をしてくださった。日本人学生と中国人学生が仲良く作業し、さまざまな形の生餃子ができあがった（写真16）。食堂の方にゆていただく間、用意された中国料理をいただき、閉会式後最後の会食となった。



写真17 上海浦東空港

9月3日（土）9時にロビーに集合し、宿舎をチェックアウトした。中国人学生も、早朝から見送りにきてくれていて、空港まできてくれた学生もいた（写真17）。最初の出会いから1週間ではあるが、友好の絆をしっかり結べた。

上海海洋大学は、9月5日から新学年が始まり、学生はもちろん、教員も入学式の準備等忙しい時期であったにもかかわらず、最初から最後まで心のもったおもてなしをしていただいた。

3. 上海海洋大学における中国文化体験プログラムの学生レポート

帰国後の学生は夏期休暇中のため、解散時に学期初めに提出する報告書の作成を課した。13名全員のレポートが国際交流・留学生支援室に提出された。()は学年と性別を示す。

■中国の文化・教育の違いに対して

- ・上海海洋大学の学生の誠実さと「学ぶ」ことへの貪欲さを強く感じた。(1男)
- ・食文化の違いが気になり、日本にはない味を体験した。(1男)
- ・街中にゴミ箱があり。設置数が多い。(1男)
- ・中国楽器や切り絵、中国結び、夜景など中国文化を肌で感じる事ができた。(1女)
- ・上海は甘い味付けの料理が多い。(1女)
- ・中国では水が日本より安く、人の体温と変わらない温かい水を飲んでいて。(3女)
- ・日本人はプライバシーを重視するが、中国人は開放的でコミュニケーション能力が高い。(3女)
- ・横笛・二胡を聴いて、草原や馬の走る様子からモンゴルが想像できて面白かった。(3女)
- ・英語は当然、日本語も話せて日本より確実に教育面でレベルが高いと感じた。(4男)
- ・中国人学生は中国語と英語、日本語の3カ国語を話すことができ素晴らしいと思った。(4女)
- ・上海は古い文化と新しい文化が混在していて日本では見られない景色に驚いた。(4女)
- ・学生スタッフが一人っ子ばかりで、とてもしっかりしていた。(4男)
- ・ボランティアの学生は自分の意見をはっきり言うが、相手の意見もしっかり受け入れ、お互いに理解し合えるところがいいと思った。(4女)

■次年度以降への提案

- ・日本人学生が日本文化を紹介する(百人一首、日本の古い歌など)。(1男)
- ・トイレトペーパーがないところが多いので、持参したほうが良い。(1男)
- ・文化・芸術などを相互に教え合う時間があればさらに良い体験ができると思った。(1女)
- ・中国の書に触れてみたいと思った。(1女)
- ・もっと長く居たかったので、2週間に延ばして欲しい。(4男)
- ・中国の学生が普段買物や食事をするところなど日常の生活を知りたかった。(4女)

■全体の感想

- ・中国についての自分の考えが大きく変わった。(1男)
- ・中国から来た学生を日本でサポートしたいと思った。(1男)
- ・毎日刺激的で、沢山学ぶことがありカルチャーショックを受けた。(1男)
- ・上海でしか体験できないこと、行けないところに行けて充実した1週間だった。(1女)
- ・良い体験、良い出会いがあって、本当に参加して良かった。(1女)
- ・上海人は本当に良い人たちだと実感できた。(2男)
- ・ボランティアの学生がプログラム以外の所にも案内してくれて、とても親切だった。楽しかったが、日本人学生が中国語を話せなかったのは残念で、もどかしかった。(3女)
- ・本学に留学している上海海洋大学の学生と一緒に、また中国へ行きたいと思った。(4男)
- ・とても素晴らしい活動だった。バンドの夜景は初めてみる美しさだった。(4男)
- ・自分たちの力でお互いに伝え合おうと努力する時間が大切だと感じた。(4女)
- ・TVやネットの情報を信じるのではなく、自分で見て感じて確かめることが大切だと学んだ研修だった。(4女)

おわりに

伊東祐郎氏は「学習者の言語能力については、文法能力・語彙能力・発音能力などを細分化して捉えるのではなく、コミュニケーションを機能させる要素を総合的な視点から捉えている」⁴⁾と指摘し、具体的な運用能力を評価している。日本の外国語教育は、文法・語彙・発音などを細分化して教えることで、実際のコミュニケーションができない結果を招いている。今回のプログラムに参加した学生たちは、自分たちが中国に来ているのに中国人学生と日本語によるコミュニケーションしかできないことに矛盾を感じていた。中国に来ているのに、中国語が話せないことを残念に思ったのである。グローバル化がもてはやされる現在、本来の語学学習の目的が再確認されるべきである。学校の成績のための語学ではなく、世界の人々とともに生きていくための相互理解のための語学でなければ意味がない。学生による海外体験プログラムを短期・長期で計画するとともに、選択・必修科目としての授業への位置づけも重要である。日本・中国の学生が、大学間を移動しやすい環境を整備することが高等教育機関にとって急務の課題であると考えられる。学生レベルの課題は、留学生に対するチューター制度の整備である。今回の上海海洋大学の日本語科の学生スタッフの活動は素晴らしかった。夏期休暇中にもかかわらず、プログラムすべてに5、6名の学生が常時参加し、スタッフ同士で密に連絡を取り合い、連携して日本人学生のサポートに一生懸命努めていた。完璧かつ爽やかな対応で、これには引率教員および参加学生全員が舌を巻いたのである。羨望を超えて、日頃の上海海洋大学の先生方の教育に敬意を表する次第である。隈本・ヒーリー順子、南里敬三両氏は「自己主張の弱さはコミュニケーション能力の低さとも関わっているようだ」⁵⁾と指摘するが、日本人学生の積極的な活動を引き出すような教育システムが切に望まれる。

今回のプログラムに参加した学生から出た意見で一番多かったのは、「マスコミによる情報が全てではない。自分の目で、自分の耳で、自分の鼻で、自分の舌で、自分の肌で感じ、とらえた情報こそが自分にとって大切なのである」という認識である。「百聞は一見に如かず」の格言を胸に刻んだことは学生の将来にとって大きな宝となるであろう。何志明氏は「その言語の背景にある文化が理解できないと、誤解が生じる可能性が高くなる」⁶⁾と指摘するが、異文化間コミュニケーションの最大のネックは自分とは違った文化・社会・宗教などに対する想像力の欠如である。異言語間における語用論的転移による異文化間コミュニケーションの理解が重要なのである。今回のプログラムに参加した学生たちは、こうした問題を実感として体験したのである。末筆ながら、こうした貴重な体験を本学の学生にもたらしめてくださった上海海洋大学の先生方および学生スタッフの皆さまに、心から感謝の気持ちを伝えたい。

注

- 1) 岩田一成他 (2012) 「ことばは、文法的に正しいかとは別に、社会的な文脈の中で、そのときの状況や聞き手が誰かなどさまざまなことを考えて適切に使われなければならない」『日本語教育能力試験に合格するための用語集』アルクp.88
- 2) 谷口すみ子 (2001) 「何が学習されなければならないか」青木直子・尾崎明人・土岐哲編『日本語教育を学ぶ人のために』世界思想社pp.16-17。
- 3) 谷口すみ子 同掲書p.17。
- 4) 伊東祐郎 (2009) 「日本語教育スタンダードをめぐる議論を終えて」萬美保・村上史展編『グローバル化社会の日本語教育と日本文化 日本語教育スタンダードと多文化共生リテラシー』ひつじ書房p.67
- 5) 隈本・ヒーリー順子、南里敬三 (2009) 「多文化環境のキャンパスにおける留学生と日本人チュ

- ーターと異文化接触」萬美保・村上史展編 同掲書p.244
- 6) 何志明 (2009) 「香港滞在中の日本人留学生及び日本留学歴を持つ香港人学生のコミュニケーションにおける問題点」萬美保・村上史展編 同掲書p.251

小児交互性片麻痺患者への家族支援に関する現状と課題

松本 禎明

九州女子短期大学専攻科子ども健康学専攻薬理学教室

キーワード：小児交互性片麻痺・難病・家族支援

The present situations and problems of the family support to Alternating Hemiplegia of Childhood (AHC) patients

Yoshiaki MATSUMOTO

Advanced course of child care and education
at Kyushu Women's Junior College

ABSTRACT

Alternating Hemiplegia of Childhood(AHC) is the rare case of intractable disease that the recognized domestic number of patients is around 50 in Japan. Support of education or the social welfare are necessary in addition to daily medical care for the ocular movement that is abnormal from the infants period, dystonic figure rank, the right and left expression uncertainty paralysis, convulsions, disturbance of consciousness.

Therefore I investigated a problem about improvement of the quality of life of patients and the support by getting the cooperation of the meeting of the Japanese AHC family association.

As a result, AHC patients and the families receive support of constant degree from a medical institution, an educational institution, a social welfare institution, but realization of the environment maintenance that equal support is received in a community, common understanding with the medical staff about the action of the medicine, improvement of the recognition of AHC, information sharing of each other's symptoms and care are important.

Through medicine development of the recent drug re-positioning and analysis of the genetic mutation, realization of new treatment means is expected.

Key word: Alternating Hemiplegia of Childhood (AHC), intractable disease, support

要 旨

小児交互性片麻痺Alternating Hemiplegia of Childhood (以下、「AHC」と言う。)は、認知されている国内の患者数が50人程度の希少難病である。乳幼児期から、異常な眼球運動、ジストニア姿位、左右不定に発現する麻痺、痙攣、意識混濁などを伴うため退院後家庭においても常時医療的ケアを必要とし、家族の負担は大きい。その上教育や社会福祉の支援が必要である。そこで今回、患者の保護者団体であるAHC親の会の協力を得て、患者が日常の生活の質の向上を図る上での支援のあり方並びに今後の課題や要望について書面調査を行った。その結果、医療機関、教育機関又は社会福祉関係施設からそれなりの支援を得られているものの、地域社会の中で同様の支援が得られるような環境整備や医薬品の主作用と副作用についての医療スタッフとの共通理解、AHCの認知度を向上させることによってお互いの症状や対応方法など情報を一元化し有効活用するなどの課題があることが分かった。近年では、薬物治療の面でもドラッグリポジショニングによる薬の開発に加え遺伝子解析による遺伝子突然変異の特定などが可能となりその動きが加速し、治療方法の開発に向けた動きがさらに活発になっていくものと考えられる。

I. 緒 言

小児交互性片麻痺Alternating Hemiplegia of Childhood (以下、「AHC」と言う。)は、新生児期から乳児期にかけて発症する左右不定の一過性の片麻痺又は四肢麻痺(弛緩性麻痺と筋緊張亢進を伴う)を繰り返し発現する疾患である。これに加えて、左右非対称性異常眼球運動、ジストニア姿位などを特徴とする。麻痺については、短い時間で終わることもあれば数日間続いてしまい、その麻痺が呼吸器にも及び呼吸困難や呼吸停止に陥ることや意識混濁などの深刻な場面に陥る例もある。しかし、殆どの患者において睡眠中は容態が穏やかで麻痺は起きにくい傾向がある。周囲の環境の変化にも敏感で反応しやすく、感覚の過感受性が見られる。また、精神発達遅延は、程度に差はあるものの多くの例に認められるため、集団生活で支障をきたす場合がある。

この疾患の治療方法や治療薬の開発を困難にしている原因には、患者数が全国で50例程度と著しく少ないことにある。医療関係者においてAHCに対する認知度が低く、症例を診た経験のある医師は殆どいないという現状が臨床研究の推進をさらに難しくしている。また、このことが影響して、基礎研究においても病態動物モデルの開発とその後の治療薬の開発研究が遅れているのが現状である。

一方、現在の研究の流れの中でカルシウムチャンネルを中心に検討中であり、従来から対症療法薬として使用されているカルシウム拮抗薬のフルナリジン^{1), 2)}はこの疾患の中核症状(痙攣発作、麻痺、意識混濁、呼吸困難)の著明な緩和作用を有するものとして、患者に広く使用されている。フルナリジンは元来脳梗塞後遺症や脳出血後遺症に伴う慢性脳循環障害の諸症状の改善を目的として我が国で承認され使用されていたが、副作用としてパーキンソン様の症状すなわち錐体外路症状や抑うつ症状の発生が懸念され、ついに1999年再評価の申請が取り下げられた結果、販売中止となった。これまで、本来の適応外の使用(いわゆるドラッグリポジショニング的使用)ではあったが、AHCの特効薬として長期間使用していた患者に大きな打撃を与えることになった。

2003年にAHC親の会が情報交換や相互支援の組織として結成され、その後時が流れ成人を迎える患者も多くなってきている。患者とその家族にとっては、症状に追随した医療的ケアと教育や社会福祉関係の支援を受けながら、少しでも症状改善に繋がるような生活環境作りへの涙ぐましい努力が続いている。患者数が少ないため患者同士の情報交換、意見交換の機会は限られるが、年1回東京/大阪で交互に開催される全体会に加え、AHC親の会設立当初十分でなかったインターネット通信環

境の劇的な進歩によりリアルタイムでの情報共有ができるようになってきていることはせめてもの救いである。

そこで、今回AHC親の会全体会（2016年8月6日、東京大崎）に出席の会員に協力を得て、医療、福祉及び生活の環境の現状について書面調査を行い、今後取り組むべき課題を考察することとした。

Ⅱ. 調査方法

AHC親の会（2003年設立）の年1回の全国集会としての全体会（東京品川区大崎）にて、患者保護者への協力を得て2016年8月6日（AHC2016）にて書面調査を行った。調査内容は次の通りで、自由記述とし9家族に協力をお願いし、同意を得て9家族分の回答を得た。なお、調査実施に当たり、個人が特定されないよう個人情報保護に努める旨説明した。

（書面調査内容）

AHC2016における参加保護者の皆様への書面調査

- 質問1 調査時点でのお子様の年齢をお書きください。
- 質問2 保育、特別支援教育又は障害者支援などの施設に依存する程度、課題及び期待するものをお書きください。
- 質問3 医療スタッフ又は家族による医療的ケアの必要性の程度、課題及び期待するものをお書きください。
- 質問4 近年ドラッグリポジショニングとしての医薬品開発（従来の医薬品の他用途での開発）が加速している動向をどのように感じますか。
- 質問5 普段お子様の症状と医薬品使用時の主作用、副作用は記録して医療スタッフへ伝え情報の共有と相互理解が十分できていると思いますか。
- 質問6 その他、AHCに関して何か気になること（支援体制、治療関係、情報の入手と共有、将来のことなど）があればお書きください。

Ⅲ. 調査結果

書面調査によって得られた個別回答は次の通りである。

1. 患者年齢層について

20歳未満3人、20歳以上6人であった。

2. 施設に依存する程度、課題及び期待について

- ・継続的通所就労と少額であっても対価授与の重要性を指摘。
- ・施設利用先への満足度が高い。
- ・障害認定を受けての就労なるも雇用枠の拡大や就労支援体制の拡充を希望。
- ・重度の複数障害をもつも学校への通学が実現できているが、障害の有無で区別することなく地域社会で相互理解が深まるような環境作りが大切。
- ・発達支援センターの利用。
- ・AHCへの認知度の向上と症状に対する理解を得ることが必要。
- ・特別支援学校とその後の放課後のデイケアを恒常的に受けているが、全身麻痺時は前者の対応が困難な状態。
- ・地域社会の中での生活をしていくことの重要性が謳われる昨今であるが、介助が必要なため困難さを感じる。全介助ではないが、自立も難しいため安心して生活できる環境を求めたい。特に、親亡

き後の生活が不安。

- ・社会福祉入所施設の存在は重要。

3. 医療的ケアの必要性、課題及び期待について

- ・痙攣などの発作発現で常時目が離せない。医療経験豊富なスタッフにケアを求めたいが不安も多く支援を要請できないでいる。
- ・特段医療的ケアは必要としていない。
- ・平時の医療的なケアは必要ないが、発作時の対応はこの疾患の認知度の低さから適切な支援や対応を受けることが困難。外出時は必ず同伴者が必要。
- ・緊急時以外、医療的ケアは必要とはしていない。痰の吸引や胃瘻注入は、医療的ケアというより生きていくための生活支援として考えてもらいたい。
- ・フルナリジンによる発作の予防や症状の軽減を期待したい。
- ・医療スタッフへの疾患の認知度の向上を期待したい。
- ・自宅介護には介護支援者の存在は不可欠。

4. ドラッグリポジショニングとしての医薬品開発について

- ・すごく期待している。
- ・フルナリジンに代わる薬が出てくることを希望する。
- ・初めて知り期待している。
- ・すごく良いことである。
- ・フルナリジンもこの流れに乗り国内で供給が再開できることを強く望む。
- ・大いに好ましいことだ。AHCだけでなく、他の疾患で既存薬があっても高価な場合、新薬登場を待ち望む声は多いと思う。
- ・フルナリジンへの期待度大である。
- ・本人への適合薬を見つけることは難しいため良いことだ。

5. 医薬品使用時の効果における医療スタッフとの情報共有について

- ・できている。
- ・あまりできていない。
- ・医師、薬剤師へ副作用発現の話はしているが、その場で終わることが多い。
- ・気になる点はその都度医師に伝えている。例えば、特定の医薬品で全身に筋弛緩作用が見られ著しく体調を崩したことがある。

6. その他AHCに関して気になること

- ・痙攣発作、麻痺による二次的な怪我が心配。
- ・入浴時に溺れたり、食事時の麻痺により誤嚥したことがある。
- ・フルナリジンの国内販売再開を希望する。
- ・関係者での話し合いをすることは重要であるが、子ども達が楽しめるような行事を導入すると良い。
- ・AHCについて知る医療関係者が多くなることを望む。
- ・発作の有無による体調や特性について、統計的な資料が作成されると有益。
- ・少しでも発作が少なくなる医薬品が見つかるとうれしい。
- ・医師の協力を得て全国の患者カルテを調査し、情報をまとめ次のステップに繋げてもらいたい。

IV. 考 察

今回調査の9家族において、患者の年齢が成人を超えたのは6割余りとなっている。2003年にAHC親の会が設立され、一定の年月が流れ程度の差はあれそれなりの心身の成長を実感する昨今である。子どもの成長発達に伴い、それぞれの教育機関及び福祉施設などで様々な立場の方からの助言や支援を受けながら年齢を重ねている。身体的にも大きくしっかりとした体格となり、乳児期、幼児期及び学童期の頃の症状や生活支援への対応も大きく変化してきている。そのような経過をたどる中、支援を受けるだけでなくある程度自立しての活動を試みる患者もいる。様々な教育機関や施設などで過ごす場合、その成長発達に応じた就労の機会を得た場合の対価の受領は少しであっても自らの努力の証を認識できるものとして極めて重要であり、そのような就労への機会の拡大を期待する声があった。また、障害の種類や程度によって支援のあり方が区別をされるのではなく、特定の支援機関の枠を越えて、それぞれの機関が機能的に連携して地域社会全体として支援をしていく体制作りやAHC認知度の向上による症状の理解が介護支援者によるケア体制強化にとって重要であることが分かった。このような日々の生活の中での指摘に加えて、現在継続的な介助支援が必要な子どもが年齢を重ねるにつれて、将来への不安も感じているようであった。親が病気などの不測の事態でケアができなくなった場合に、誰が関わり介助を行うのか、将来の社会福祉支援体制は大丈夫なのかという懸念は、現実を直視すればするほど感じざるを得ない現状がある。

最近の医薬品の開発に関する話題として、ドラッグリポジショニングがクローズアップされている。^{3)、4)} これは、既存薬の用途以外の疾患や症状に有効に作用することを見出し、新しく実用化に結びつける考え方である。これは新規の医薬品開発には莫大な費用を要することと異なり、既にある程度の安全性が担保されている医薬品から生まれた適応拡大であるため、新規化合物から開拓していくより遥かに効率的であり、コスト削減にも大きく貢献するという側面もある。今後も、ドラッグリポジショニングの考え方は、既存薬からだけでなく、既に承認が取り消された医薬品も対象とすべきであり、今回の調査でもそれに該当するフルナリジンの復活を希望する意見が複数あった。特に原因がつかみにくい難病・希少疾患⁵⁾ については、採算面を含めて研究そのものが進みにくいという問題がある。既に承認取り消しになった医薬品は、国内では入手することができないため患者家族は、多少の医薬品成分の安全性へのリスクを感じながらも高額な費用を投じて海外から個人輸入をせざるを得ない現状がある。

医薬品使用時の主作用、副作用に関する医療スタッフ間との情報の共有と理解については、できているという声もあったが様々な情報を伝えてもその場限りになってしまっていることもあるようである。このことは、他の疾患でも聞くことがしばしばあるが、その理由として、医師が患者を診る時間にはどうしても限界があり、その限られた時間にどれだけ中身の濃いコミュニケーションがとれるかが鍵となる。医師は、基本的に患者が医療機関を訪れ、対面診察時にしか患者やその家族から情報を得ることができない。すなわち、医師は、スポット的な情報は得られても日々の生活の中での症状の変化や医薬品の影響を詳細に把握することは難しい。これを解決する手段として重要なのは、これらに関する情報を記録した文字が媒体となることである。記録を取ることはかなりの負担になるかもしれないが、簡潔な形でも良いので状況の変化を経時的に表現することは重要である。患者が教育機関や社会福祉施設などで過ごしている間、生活の様子を観察可能な支援職員からの情報提供も貴重である。近年スマートフォンやタブレットなど情報端末が広く普及していることから、手早くスケジュールアプリケーションなどを使用して医薬品の作用の状況を文字入力していくと日時記録も残り、それを一定周期で振り返ることでより効果的な医薬品の選択に繋がるものと考えられる。記録のための文字入力負担であれば、情報端末に所見を音声で録音したり、動画記録するのも有効な手段と考えら

れる。このような隙間を埋める工夫により、医療スタッフは日々の連続した生活の中での医薬品の作用の情報が得られ、よりの確な医薬品の選択ができるものと思われる。患者を支援する家族や支援職員が医薬品の作用として気付かないことであってもこのような記録工夫をして医療スタッフに提供すれば、真の効果の有無を判断して頂けることに繋がる。周囲の支援者が、あまり効果がないと感じられる医薬品の作用でも医師などの医療スタッフにとっては症状の進行をある程度抑制できていたり、重篤な症状へ至ることを防ぐことに貢献していると判断する場面も十分に想定され、無用な不安を抱かずに済むことも当然出てくるであろう。

AHCは特に把握されている患者数が著しく少ない難病・希少疾患であり、患者相互間の情報把握も他の疾患に比べると極端に少ないことが気がかりなことである。個々の患者は、主治医をもちそこで診察の機会を得ているが、医療スタッフにとって他に症例経験の機会はなきに等しいため治療への試行錯誤が続いているものと考えられる。打開策としては、今回調査の回答での指摘もあったが、少ない症例であっても全国レベルで患者の診療記録が共有されることが実現すれば対症療法であってもより効果的な治療、医薬品の選択に結びつき患者家族の不安を少しでも軽くすることに貢献できるものと考えられる。

近年では、遺伝子解析が進み各疾患の原因異常遺伝子が次々と特定されている。AHCも例外ではなく、2012年以降国内外で遺伝子ATP1A3の突然変異⁶⁾が多くの患者に見られp.Asp801Asn⁷⁾、p.Glu815Lys及びp.Gly947Argなどが特定されるに至っている。^{8)、9)} これら遺伝子解析による突然変異箇所を見出していくことが、病態動物モデルの開発や治療薬の開発を加速させていくものと期待される。

指定難病に関する行政の動きとしては、従来56の難病に対して治療法開発のための治療費助成として「特定疾患治療研究事業」があり、2016年1月に「難病の患者に対する医療等に関する法律（難病法）」（110の難病）が施行され、2016年7月には306と大幅に増えた。また、厚生労働省は2016年9月30日に第17回厚生科学審議会疾病対策部会指定難病検討委員会を開催し、「既存の指定難病等に含まれるものとして検討する疾病（個票）」資料が提出され、ATP1A3遺伝子異常を指摘したAHCが取り上げられて今後の対応が検討され、国の支援の糸口がようやく見えてきたところである。しかしながら、AHCとして現在認知されている患者数が少ないことには変わりがなく、その影響でAHCではない診断がなされている例が埋もれている可能性があり、今後はAHCの認知が広がるような臨床的、学術的な活動に加え、教育や福祉関係の支援者なども交えて症例とその対応事例の地道な啓蒙活動を行っていくことが望まれる。また、これからの医療スタッフを養成している高等教育機関での医学教育、看護教育、薬学教育及び社会福祉学教育などでも希少難病に関する教育プログラムを積極的に導入していく必要がある。同時に医療分野における個人情報守秘義務は関連する分野にも拡大していくことになるため各分野でのリスクマネジメント教育を進めていく必要がある。

V. 謝 辞

今回書面調査に全面ご協力頂いたAHC親の会の皆様に深謝する。

VI. 参考文献

- 1) Matsumoto Y., Kataoka Y., Watanabe Y., Miyazaki A., Taniyama K., Antianxiety actions of Ca²⁺ channel antagonists with Vogel-type conflict test in rats., *Eur J Pharmacol.*, 13 : 264 (1), pp.107-110., 1994

- 2) 松本禎明、江頭伸昭、松嶋彩乃、富金原知代、小児交互性片麻痺におけるflunarizineの影響に関する行動薬理学的研究、九州女子大学紀要、第45巻2号、pp.31～43、2008
- 3) 水島 徹、DRUG RE-PROFILING研究の現状と課題、日本薬学会第130年会要旨集1、p.182、2010
- 4) 辰巳邦彦、ドラッグ・リポジショニングと希少疾患イノベーション、統括研究員 政策研ニュース 医薬産業政策研究所、No.35、2012
- 5) 児玉知子、富田奈穂子、難病・希少疾患対策の国際的な動向保健医療科学、60 (2)、pp.105～111、2011
- 6) Heinzen EL. et al., De novo mutations in ATP1A3 cause alternating hemiplegia of childhood, Nat Genet. 44 (9), pp.10304, 2012
- 7) Ishii A., Saito Y., Mitsui J., Ishiura H., Yoshimura J., Arai H., Yamashita S., Kimura S., Oguni H., Morishita S., Tsuji S., Sasaki M., Hirose S., Identification of ATP1A3 mutations by exome sequencing as the cause of alternating hemiplegia of childhood in Japanese patients, PLoS One., 8 (2), e56120, 2013
- 8) Panagiotakaki E. et al., Clinical profile of patients with ATP1A3 mutations in Alternating Hemiplegia of Childhood-a study of 155 patients, Orphanet J Rare 26 (9)10: 123, 2015
- 9) Motoki T., Sasaki M, Ishii A., Hirose S., Characteristic asymmetric abnormal eye movement and dystonic posture as the first symptoms of alternating hemiplegia of childhood, No To Hattatsu, 48 (2), pp.133～136, 2016

九州共立大学リコンディショニングルームにおける 医療機関との連携方法の現状と課題

栗谷 健礼・篠原 純司・辰見 康剛・中村 奈菜
九州共立大学スポーツ学部スポーツ学科

キーワード：アスレティックリハビリテーション，学生アスリート，アスリートサポート

Current Status and Issues of Cooperation Methods with Medical Institutions in The Kyushu Kyoritsu University Reconditioning Room

Takenori AWATANI, Junji SHINOHARA, Yasutaka TATUMI,
Nana NAKAMURA

Department of Sports Science, Faculty of Sports Science,
Kyushu Kyoritsu University

ABSTRACT

The purpose of this study is to clarify the current situation and problems of cooperation method with medical institutions by comparing the 2015 and previous report.

In cooperation method with medical institutions, the difference between the previous report was studied using the χ^2 test. Cooperation method with medical institutions faculty contact was significantly higher than previously reported ($\chi^2 = 10.031, p < 0.01$). This study revealed that the student athlete support has been improved towards enrich.

Key word: Athletic rehabilitation, Student Athlete, Athlete support

I. 緒言

九州共立大学リコンディショニンググループ（RCR）では、学生アスリートを対象にスポーツ傷害相談を行っている。

このスポーツ傷害相談は、(1) 擦り傷、切り傷、捻挫、打撲などの急性の怪我、(2) 腰痛、膝の痛み、肩の痛みなどの慢性の怪我、(3) その他、スポーツで発生した怪我を対象としている。このスポーツ傷害相談では、怪我の評価を行ない、必要に応じて(1) 傷害相談、(2) 近隣医療機関の紹介、(3) 怪我の救急処置、(4) 競技復帰に向けたアスレティックリハビリテーション（アスリハ）、(5) スポーツ外傷・障害の予防のためのコンディショニングという対応を行っている。競技復帰に向けたアスリハは、医療機関において医師の診断を受けたものが対象となり、医師の指示のもと決定されたプログラムを実施している。

医療機関内のみでなくスポーツ現場でのアスリハも、医師の医学的な判断を基に進行しなくてはならない¹⁾。しかしながら、本学は他の多くの非医学系大学のように、学内で整形外科診療を受けることができない²⁻⁴⁾。そこで、過去に、学生アスリートサポートの充実化に向けて、医療機関との円滑な連携を図る方法の検討を行った⁵⁾。その結果、医療機関との連携方法は学生アスリートの口頭（学生口頭）が多く、教員による書面・電子メールおよび電話・面談（教員連絡）の割合を向上させるため、書面の内容を思慮し、医療機関との連携方法の簡便性を向上させることも重要であると報告した⁴⁾。

過去の報告で検討した連携方法の実践として、2015年度に医療機関との連携用の簡便な文書を作成し、導入した（図1）。今後、RCRでのアスリハ環境をより良く改善するためには、RCRでアスリハを実施した学生アスリートの医療機関との連携方法について現状と課題を明らかにする必要である。そこで、本研究では、2015年度と過去の報告を比較し、医療機関との連携方法の現状と課題を明らかにすることを目的とした。

II. 方法（図1）

1. 調査期間

調査期間は2015年4月から2016年3月までの1年間とした。

2. 対象

RCRでの対応は傷害相談、医療機関の紹介、救急処置、アスリハ、コンディショニングに分類して調査した。期間中、新たにRCRを来室した71例中、アスリハを行った33例を対象とした。

3. 調査内容

調査内容は治療方針、医療機関との連携方法とし、各調査内容は以下のように分類した。

(1) 治療方針：保存療法、手術療法

(2) 医療機関との連携方法：学生口頭、教員連絡

(3) 教員連絡が実施された症例における具体的な方法：医療機関から提供された文書（提供文書）、医療機関に提出をした文書（提出文書）、連絡が可能な医療機関へのメール（メール）、診察への付き添いによる面談（面談）

4. 統計学的分析

治療方針と医療機関との連携方法の関連はFisherの正確確率検定を用いて検討した。医療機関との連携方法において、学生口頭と教員連絡の差、過去の報告との差は、それぞれ χ^2 検定を用いて検討した。統計学的分析にはR2.8.1を使用した。

【コンディショニング報告書】

〇〇病院 〇〇先生御侍史

〒807-8585 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-8
九州共立大学 スポーツ学部 講師
リコンディショニングルーム AT

栗谷 健礼
理学療法士、日本体育協会公認アスレティックトレーナー
TEL: [REDACTED] FAX: [REDACTED]
E-Mail: [REDACTED]

患者氏名	性別
生年月日 平成 年 月 日	年齢

拝啓 時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。
平素は格別のご厚誼を賜り厚く御礼申し上げます。
早速ではございますが、コンディショニング経過を以下のようにご報告させていただきます。

敬具

経過及び現状

プログラム

平成 年 月 日

【指示書】

恐れ入りますが、この度のご高診による病状および治療方針についてご指示をお願い致します。リハビリテーションに関する実施内容についてもご指示いただければ、ご指示いただきました内容を実施致します。ご多忙のところ誠に恐縮ですが、よろしくお願い申し上げます。

①競技復帰時期： 〇ヶ月後 , 〇週間後

②治療方針：

③実施内容： 貴院での理学療法（有・無）
お任せいただける内容にチェックをお願いします。
 患部外エクササイズの実施
 貴院での理学療法患部エクササイズの継続実施（内容のご指示をいただければ幸いです）
 本学での患部エクササイズプログラムの作成・実施
 貴院での患部エクササイズプログラム（別紙でも結構でございます）

④注意事項：
●
●
●
 患部エクササイズにおいて、特別な事項がないようでしたら、こちらへチェックをお願いします。
⑤その他：

次回診察日： 年 月 日 特別な事項がなくお任せいただけるようでしたらこちらへチェックをお願いします。

貴院名 _____ ご芳名 _____

図1 医療機関への提出文書

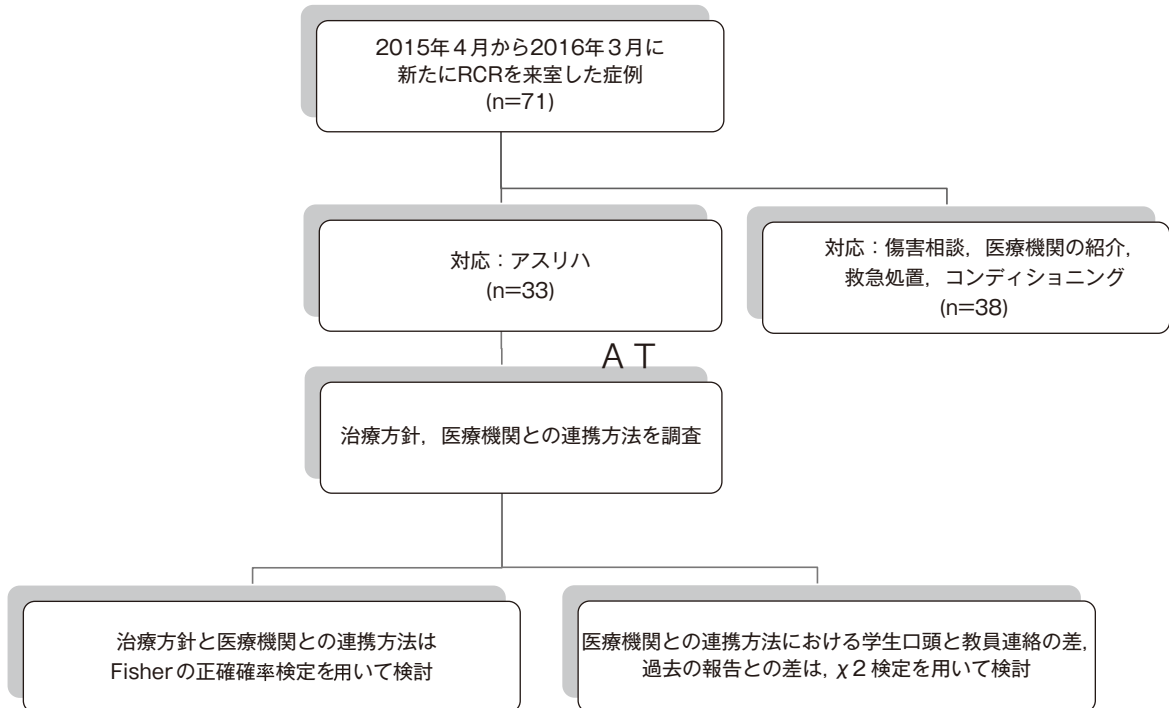


図2 研究方法のアウトライン

Ⅲ. 結果

治療方針と医療機関との連携方法は有意な関連が認められなかった ($p=0.393$) (図2)。医療機関との連携方法は学生口頭が有意に多かった ($\chi^2=5.964$, $p<0.05$) が (図3)、過去の報告よりも、教員連絡が有意に多かった ($\chi^2=10.031$, $p<0.01$) (図4)。教員連絡が実施された症例における具体的な連絡方法は表1に示した。

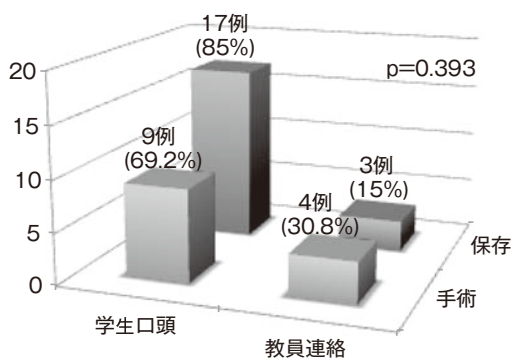


図3 治療方針と医療機関との連携

治療方針は保存療法と手術療法に分類、医療機関との連携方法は学生アスリートの口頭（学生口頭）と教員による書面・電子メールおよび電話・面談（教員連絡）に分類し、Fisherの正確確立検定を用いて関連を検討した。

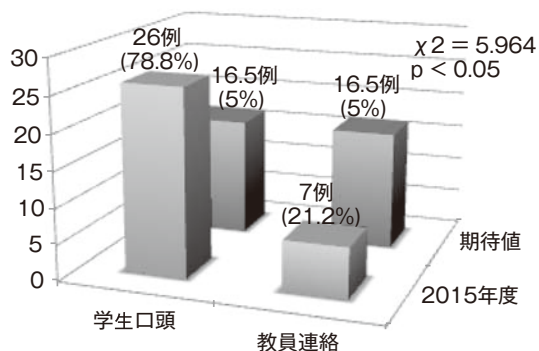


図4 医療機関との連携方法

医療機関との連携方法は学生アスリートの口頭（学生口頭）、教員による書面・電子メールおよび電話・面談（教員連絡）に分類し、 χ^2 検定を用いて分析した。

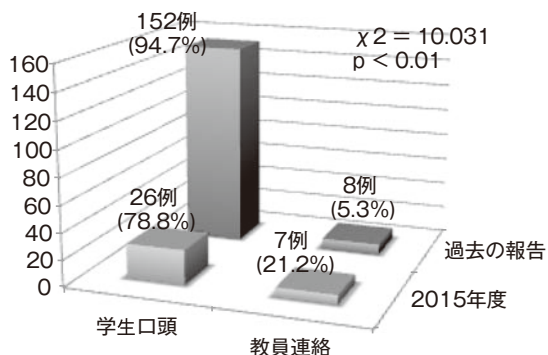


図5 医療機関との連携方法における過去の報告との比較
2015年度と過去の報告⁵⁾を、 χ^2 検定を用いて分析した。

表1 教員連絡が実施された症例における具体的な連絡方法

症例	教員連絡方法
症例1	提供文書
症例2	提出文書
症例3	提出文書
症例4	メール
症例5	提出文書
症例6	メール
症例7	面談

提供文書: 医療機関から提供された文書

提出文書: 医療機関に提出をした文書

メール: 連絡が可能な医療機関へのメール

面談: 診察への付き添いによる面談

Ⅳ. 考察

本研究の治療方針と医療機関との連携方法は有意な関連が認められなかった ($p=0.393$) (図2)。また、医療機関との連携方法は学生口頭が有意に多かった ($\chi^2=5.964$, $p<0.05$) (図3)。これらの結果は、過去の報告⁵⁾と同様である。栗谷ら⁵⁾は学生アスリートからの口頭情報のみでは、情報の正確性に欠けるため、適切なアスリハを行う上での改善点であると考えられると述べており、本研究においても依然として課題であることが明らかとなった。

一方、過去の報告⁵⁾と連携方法を比較すると、教員連絡が有意に多かった ($\chi^2=10.031$, $p<0.01$) (図4)。つまり、学生アスリートサポートの充実化に向けて改善が図られており、情報の質

が向上していると考えられる。また、教員連絡が実施された7例の具体的な連絡方法のうち3例は新たに導入した文書であった。このことから、新たに導入した文書が、連携を図る一方法として活用可能であると考えられる。しかしながら、簡便な文書ではあるが、多忙な医療機関にとっては負担となる。また、本学の教員にとっても実習指導及びアスリハ指導と同時に連携文書を作成することは、非常に困難である。したがって、他大学のようなアスリハ指導を行う専門職員の配置などが、アスリートサポートを充実化させるのではないかと考えられる。

その他の方法として、学生トレーナーを診察に同席させ、的確な情報収集を行わせるという方法もある。これには、医学的知識が高く、医療系職種と適切な情報交換が可能な即戦力となる学生トレーナーの養成が必須となる。しかしながら、医療系職種である理学療法士養成過程と比較すると、本学の講義や実習時間は少なく⁶⁾、不十分な知識と技術段階で診察に同席させることになる。そのため、カリキュラムの講義や実習以外に学生トレーナー部への「チェックアウト」という学習機会や「やる気支援」での学習機会を用いて、知識と技術の向上を図っている。今後、学習効果や学習機会の必要性についての検討、どの程度の知識水準により診察の同席が可能かの検討などを行い、新たな到達目標を明示した学習過程を構築することも重要な事項であると考えられる。しかしながら、現状の教員数おける個々の努力では、今以上の学習機会を提供することは困難であり、さらなる人員の増員が必要ではないかと考えられる。

本研究は連携方法のみを調査しており、症例ごとの教員連絡の必要性については検討していない。今後は症例ごとに連携方法の検討が必要である。

V. 結 論

学生アスリートサポートの充実化に向けて、医療機関との円滑な連携のために簡便性を向上させることも重要である⁵⁾。そこで、本研究では、2015年度と過去の報告を比較し、医療機関との連携方法の現状と課題を明らかにすることを目的とした。

本研究の結果、医療機関との連携方法において過去の報告よりも教員連絡が有意に多く、学生アスリートサポートの充実化に向けて改善が図られていることが明らかとなった。しかしながら、医療機関との連携方法は未だ学生口頭が有意に多いという問題も明らかとなった。今後は、症例の経過を含めた連携方法の検討が必要である。

VI. 参考文献

- 1) 小林寛和：アスレティックリハビリテーションの概要、河野一郎（監修）、公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト7 アスレティックリハビリテーション、財団法人日本体育協会、第1版、2007、p11.
- 2) 佃文子、河合優美：新設スポーツ大学におけるアスレティックリハビリテーションの現状と問題点、びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要、4、2007、73-88.
- 3) 木下訓光、目浦幹夫、泉重樹：健康・スポーツ系大学学部におけるスポーツ医学診療のあり方について：法政大学スポーツ健康学部クリニックの取り組みと現状、法政大学スポーツ健康学研究、4、2013、47-57.
- 4) 森北育宏、前島悦子、古屋桂子、粟谷健礼、魚田尚吾、熊崎大輔、清水正輝、片岡裕恵：大阪体育大学診療所の現状と課題、大阪体育大学紀要、45、2014、121-127.
- 5) 粟谷健礼、篠原純司、辰見康剛、中村奈菜：九州共立大学リコンディショニンググループにおける

学生トレーナー教育と学生アスリートサポートの充実化に向けた医療機関との連携方法の検討、九州共立大学研究紀要、6（1）、2015、43-47

- 6) 関東甲信厚生局：理学療法士作業療法士養成施設指導要領について（平成11年3月31日健政発第379号厚生省健康政策局長通知）、更新日2015年2月20日、http://kouseikyoku.mhlw.go.jp/kantoshinetsu/shokan/kankeihourei/documents/yoryo_rigaku.pdf、（閲覧日2016年9月27日）。

フラッグフットボール日本代表チームにおける 運動能力測定の実践的研究

粟谷 健礼・永田 聡典
九州共立大学スポーツ学部スポーツ学科

キーワード：プロアジリティシャトル, 10mスプリント, 非接触フラッグフットボール

Practical Research of Athletic Ability Measurements in Flag Football Japan National Team

Takenori AWATANI, Akinori NAGATA
Department of Sports Science, Faculty of Sports Science,
Kyushu Kyoritsu University

ABSTRACT

In athletic ability measurements were performed on the men's Japan representative player of the 8th IFAF Flag Football World Championship, the problem and solution of measurement were examined.

The measurement was performed Pro-agility shuttle test (PA), reaction 10m sprint test (R10m), 10m sprint test (10m) and vertical jump test (VJ). In the result of measurement, PA and 10m upper four players had a leading player. The ability to be measured by the PA and the 10m in flag football players may be important. Therefore, continuous study is needed to examine if the PA and 10m measurements are showing strong reflection of athletic ability of flag football players.

Key word: Pro-agility shuttle, 10m sprint, Non contact Flag Football

I. 緒言

フラッグフットボールはアメリカンフットボールで行われる「タックル」を、プレイヤーの腰の左右につけた「フラッグ（旗）」を取ることに置き換え、敵味方の選手同士の身体的接触を禁止とした、安全で幅広い層の人々が参加出来ることを目指したフットボールとして考案された¹⁾。日本には「アメリカンフットボールの価値や特性を元にしてつくられた新しいスポーツ」として1990年代後半に伝えられた¹⁾。その後、日本フラッグフットボール協会（JFFO）が用具や教材の支援、作戦コンクール、講習会などの活動を実施¹⁾、小学校学習指導要領解説体育編²⁾のゴール型ゲームにも例示され、国内でも広く普及しつつある。

また、競技スポーツとしても発展途上であり、JFFOが主催するNFLフラッグフットボール日本選手権への2015年度の参加者は小・中学生と一般を合わせて3,014名であったと報告されている¹⁾。JFFOのルール³⁾では、フィールドが縦60ヤード、横30ヤード、5人対5人で3rdダウン制によって行われる。世界的には、国際アメリカンフットボール連盟（IFAF）が2002年から2年に1回、世界選手権を開催しており、日本からは日本アメリカンフットボール協会（JAFA）が日本代表を派遣している。IFAFのルール⁴⁾では、フィールドが縦70ヤード、横25ヤード、5人対5人で4thダウン制によって行われる。JFFO、IFAFルールともに身体的接触は禁止されており、これにはタックルだけでなくブロックも含まれる^{3, 4)}。

研究分野においても、フラッグフットボールの持つ戦略的な競技特性が戦術的課題に取り組みやすいと注目され、その教育的価値について多くの研究が行われており、徐々に進展している。一方で、「MEDLINE」および「SPORTDiscus」において、キーワード「flag football」で検索したが、運動能力の調査など、非接触フラッグフットボールの競技スポーツとしての研究はあまり行われていない。競技スポーツとしての発展は、競技の普及においても重要であり、その研究もまたフラッグフットボールの発展に重要な事項であると考えられる。しかしながら、競技スポーツとして発展途上にあるため、研究実施において様々な課題があると考えられる。

競技運動能力に関して、アメリカンフットボールでは、National Football League (NFL) のドラフト候補選手たちに様々なテストが行われるNFLコンバインにおいて、10ヤード、20ヤード、40ヤードスプリント、3コーンドリル、プロアジリティシャトルテスト（PA）、垂直跳びテスト（VJ）、立ち幅跳び、ベンチプレスなどの測定が行われる⁵⁾。一方、日本におけるフラッグフットボールはアマチュアスポーツであり、成人の場合、一般社会人として就労しているため、練習頻度や練習時間も限られており、研究実施のためには測定項目を厳選する必要がある。測定項目として、アメリカンフットボールのスキルポジションと呼ばれる選手は、10ヤードスプリント、40ヤードスプリント、3コーンドリル、PA、VJが重要であると報告されている^{6, 7)}。フラッグフットボールはアメリカンフットボールの特性を持ちつつも、アメリカンフットボールよりもフィールドが小さい。また、スクリーンラインから7ヤード離れた位置からブリッツァーによるブリッツ⁴⁾があるにもかかわらず、ブロックができないため、プレーの開始からパスやランを行うまでの時間が非常に短い。そのため、繰り返し動作の速さ、反応を伴う短い距離の疾走能力、短い距離の疾走能力が求められる。

そこで、PA、反応10mスプリントテスト（R10m）、10mスプリントテスト（10m）、VJの4項目を選出し、第8回IFAFフラッグフットボール世界選手権の男子日本代表選手に実施した運動能力測定から、測定実施における課題と対策について検討することを本研究の目的とした。

II. 方法 (図1)

1. 測定日

フィールド条件を一定にするため、ゴムチップ入り人工芝を利用する2日を測定日として設けた。第1回を2016年5月の他チームとの合同練習時に、第2回を2016年7月の試合時(交流戦)に実施した。

2. 対象

第8回IFAFフラッグフットボール世界選手権の男子日本代表チームに所属する選手15名を対象とした。いずれかの測定に参加した選手が11名、両測定とも不参加の選手が4名であった。第1回測定が10名、第2回測定が9名、そのうち2回の測定とも参加した選手が7名であった。

3. 測定項目

測定はプロアジリティシャトルテスト(PA)、反応10mスプリントテスト(R10m)、10mスプリントテスト(10m)、垂直跳びテスト(VJ)の4項目を選出した。短い距離の疾走能力測定は他競技とも比較できるように10mを採用した。測定は各3回行った。

第1回測定は以下の3項目を行った。

- (1) 第1回PA(PA1): このテストは5ヤード間隔で3本線を引き、中央の線からスタートし、5ヤード先の線で切り返し、10ヤード先の反対側の線で再び切り返して、中央の線をゴールとする20ヤードシャトルランである。測定は前の足を中央の線上に置いた状態でのスタンディングスタートで、切り返しの際に線は踏み越えるよう指示し、中央の線に光電管を設置して測定した。NFLコンバインで行われるPAは光電管で行われませんが、本研究では精度を重視するため、光電管を利用した。NFLコンバインでは切り返し線を手で触れることになっているが、本研究では判断を明確にするため足で踏み越えることとした。
- (2) R10m: 測定区間を10m設け、スタートは合図とともに手動で行い、ゴールは光電管を用いた。測定は前の足を中央の線上に置いた状態でのスタンディングスタートで、胸部からゴールするよう指示した。
- (3) VJ: iPod touch (Apple, Inc.) を高さ1.6m、対象から2.5mの位置に設置して、iOS APP (JumpPower, App Store) を用いて行った。NFLコンバインではヤードスティックが用いられるが、簡便性を考慮し、運搬可能なデバイスを用いた。

第2回測定は以下の2項目を行った。

- (1) 第2回PA(PA2): 第1回測定と同様の方法で行った。
- (2) 10m: 測定区間を10m設け、スタート、ゴールともに光電管を用いた。測定は前の足を中央の線上に置いた状態でのスタンディングスタートで、各選手に任意にスタートを行わせ、胸部からゴールするよう指示した。

4. 分析

測定結果の最低値を除外した2回の平均値を代表値とし、各項目において順位付けを行った。

III. 結果

測定結果は表1に示した。PA1は最も早い選手が4.38秒、次いで4.43秒、PA2は最も早い選手が4.42秒、次いで4.43秒であった。PA1およびPA2ともに上位4選手は主力選手であった。VJは最も高い選手が59.9cm、次いで59.3cmであった。R10mは最も早い選手が1.98秒、次いで2.09秒であった。10mは最も早い選手が1.73秒、次いで1.75秒で、上位4選手は主力選手であった。

表1 測定結果

	選手		ポジション	PA1 (秒)	VJ (cm)	R10m (秒)	10m (秒)	PA2 (秒)
主力選手	OF, DF	1	QB, DB, LB	4.38 (1)	59.3 (2)	1.98 (1)	1.83 (3)	4.43 (2)
	DF	2	DB	4.45 (3)	50.2 (8)	2.16 (5)	1.85 (4)	4.50 (3)
	OF	3	WR	4.67 (7)	52.3 (7)	2.17 (6)	1.98 (8)	NM
	DF	4	LB	4.53 (4)	53.1 (6)	2.24 (7)	NM	NM
	OF, DF	5	RB, B, DB	4.43 (2)	56.9 (3)	NM	1.75 (2)	4.42 (1)
	OF, DF	6	C, DB	NM	NM	NM	1.73 (1)	4.50 (3)
控え選手	OF, DF	7	QB, B	4.65 (6)	59.9 (1)	2.13 (4)	1.90 (7)	4.56 (5)
	DF	8	DB	5.15 (10)	40.1 (10)	2.41 (9)	2.11 (9)	5.06 (7)
	OF, DF	9	RB, B	4.73 (8)	56.4 (4)	2.09 (2)	1.85 (4)	NM
	OF	10	C	4.61 (5)	56.0 (5)	2.09 (2)	1.87 (6)	4.80 (6)
	DF	11	LB, DB	4.86 (9)	48.1 (9)	2.29 (8)	NM	NM

(rank)

OF; オフェンス出場, DF; ディフェンス出場, QB; クォーターバック, DB; ディフェンスバック, LB; ラインバッカー, WR; ワイドレシーバー, RB; ランニングバック, B; ブリッツァー, C; センター, PA1; 第1回プロアジリティシャトルテスト, VJ; 垂直跳びテスト, R10m; 反応10mスプリントテスト, 10m; 10mスプリントテスト, PA2; 第2回プロアジリティシャトルテスト, NM; Not measured

IV. 考 察

全米大学体育協会 (NCAA) ディビジョン3のアメリカンフットボール選手を対象とした測定では、スキルポジションのPAの平均値が4.51秒から4.33秒であったと報告されている⁸⁾。また、ノルウェーのプロサッカー選手を対象とした測定では、10mの平均値が1.82秒であったと報告されている⁹⁾。測定の結果、PA1は最も早い選手が4.38秒、次いで4.43秒、PA2は最も早い選手が4.42秒、次いで4.43秒、10mは最も早い選手が1.73秒、次いで1.75秒で、それぞれ上位4選手は主力選手であった。過去の報告とは測定方法が異なるため、単純な比較はできないが、本研究のPAおよび10mの上位2名は高いレベルであると考えられる。また、ディフェンス出場の主力選手はPAと10mの上位を占めていた。一方、オフェンス出場の主力選手は選手3を除いてPAと10mの上位を占めていた。その他のVJおよびR10mの上位選手は主力と控えに混在していた。以上のことから、フラッグフットボール選手においてPAと10mで測定される能力は重要である可能性がある。そのため、時間が限られ4項目を実施することが困難な場合、PAと10mに測定項目を限定することで、測定時間を短縮できると考えられる。

通常練習は様々なフィールドで行っているため、フィールド条件を一定にさせることが困難である。そこで本研究では、フィールド条件を一定にさせるために、ゴムチップ入り人工芝フィールドを利用する合同練習時および試合時(交流戦)に測定を実施した。しかしながら、日程が合わず全ての選手に行くことは困難であった。また、第2回測定はPAと10mの2項目であったにもかかわらず、複数試合の実施や大会の運営も行う必要があるため、全ての選手に測定を実施することができなかった。そのため、複数の測定日を設けて日程の調整を行うことはもちろん、事前にいくつか測定計画を立案しておく必要がある。測定を主目的として実施するのであれば、ゴムチップ入り人工芝フィールドを借りるための資金調達が重要な課題となり、研究として継続的な測定を行うための競争的研究資金の獲得も対策の一つであると考えられる。

今後、PAと10mの測定がフラッグフットボール選手の運動能力を強く反映しているかどうか継続的な研究が必要である。

V. 結論

第8回IFAFフラッグフットボール世界選手権の男子日本代表選手に実施した運動能力測定から、測定実施における課題と対策について検討した。

測定の結果、フラッグフットボール選手においてPAと10mで測定される能力は重要である可能性があるため、時間が限られている場合、PAと10mに測定項目を限定することで、測定時間を短縮できると考えられる。また、全ての選手に測定を実施することができなかつたため、複数の測定日を設けた日程の調整と事前にいくつか測定計画を立案しておく必要がある。

VI. 参考文献

- 1) 日本フラッグフットボール協会：フラッグフットボールレポート2016, <https://www.japanflag.org/pdf/report2016.pdf>, (閲覧日2016年10月15日).
- 2) 文部科学省：小学校学習指導要領解説体育編, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/19/1234931_010.pdf, (閲覧日2016年10月15日).
- 3) 日本フラッグフットボール協会：NFL FLAG大会規則, https://www.japanflag.org/nfl/pdf/nflrule_c.pdf, (閲覧日2016年10月15日).
- 4) International Federation of American Football : IFAF Flag Football Rule Book 2015, http://ifaf.org/pdf/documents/rules/ifaf_flag_rules_2015.pdf, (閲覧日2016年10月15日).
- 5) Robbins DW : Relationships between National Football League combine performance measures., *J Strength Cond Res.*, 2012, 26 (1), 226-231.
- 6) Teramoto M, Cross CL, Willick SE : Predictive Value of National Football League Scouting Combine on Future Performance of Running Backs and Wide Receivers., *J Strength Cond Res.*, 2016, 30 (5), 1379-1390.
- 7) Sierer SP, Battaglini CL, Mihalik JP, Shields EW, Tomasini NT : The National Football League Combine : Performance Differences Between Drafted and Nondrafted Players Entering the 2004 and 2005 Drafts., *J Strength Cond Res.*, 2008, 22 (1), 6-12.
- 8) Hoffman JR, Ratamess NA, Kang J : Performance changes during a college playing career in NCAA division III football athletes., *J Strength Cond Res.* 2011, 25 (9), 2351-2357.
- 9) Wisløff U, Castagna C, Helgerud J, Jones R, Hoff J : Strong correlation of maximal squat strength with sprint performance and vertical jump height in elite soccer players., *Br J Sports Med.*, 2004, 38 (3), 285-288.

2015年度リコンディショニングルームにおける 活動報告と今後に向けて

辰見 康剛・篠原 純司・粟谷 健礼・中村 奈菜
九州共立大学スポーツ学部

キーワード：アスレティックトレーナー，アスレティックリハビリテーション，教育，
アスリート

Reporting of 2015 reconditioning room activities and future prospects at The Kyushu Kyoritsu University

Yasutaka TATSUMI, Junji SHINOHARA, Takenori AWATANI,
Nana NAKAMURA

Department of Sports Science, Faculty of Sports Science,
Kyushu Kyoritsu University

ABSTRACT

In this paper, we examine the usage of the Reconditioning Room (“RCR”) based on the 2015 records and offer our view on possible future developments. The RCR provides assistance to athletes through the practice of athletic rehabilitation, including the treatment of sports injuries, prevention of possible physical problems, and administering of first aid. This also acts as practical training for students wanting to become athletic trainers. All practical training activities are carried out under the supervision of the faculty of athletic training. In 2015, a total of 553 athletes visited RCR, with the highest number of monthly visits, 146, recorded in June. 69% of the athletes treated at RCR had lower body injuries, with 25% of them reporting knee joint problems – the most common type of injury. 51% of the athletes visiting RCR came there for athletic rehabilitation. In order to improve of services provided by the RCR in the future, we find it essential to share information with sports teams, and build systems that allow for more student athletes to visit RCR and smoothen their transition back to playing sports. It is also vital to pursue cooperation with surrounding medical organizations to ensure more robust support for athletes.

KEY WORDS : Athletic trainer, Athletic rehabilitation, Education, Athlete

I. はじめに

九州共立大学リコンディショニングルーム（以下、RCR）では学内のアスリートを対象にスポーツ外傷・障害に対する応急処置やコンディショニング指導を行っている。また、これらの活動は日本体育協会公認アスレティックトレーナー（以下、AT）の資格取得を目指す本学学生の実習活動という側面も持っている。そのため、全ての実習活動は日本体育協会公認ATの資格を有する本学スポーツトレーナーコースの教員が行ない、学生トレーナーは教員の指示のもとで実習を行っている。

実習活動のひとつとして、日々の来室者の記録というものがある。その内容は個人毎の初回来室時および継続的な来室記録、またその際のコンディション情報から構成されている。これらの記録は、充実したアスリートサポートおよびトレーナー教育のために、またRCRの運営における傾向や課題の検討を行うためにも重要なものである。

本稿では2015年度におけるRCRの記録書をもとに来室状況とその活動を報告し、今後の展望を述べる。

II. RCRの活動内容

a. アスリートサポート

RCRではアスリートに対するサポート活動として、スポーツ外傷・障害に対する応急処置や外傷・障害の予防も含めたコンディショニングならびにアスレティックリハビリテーション（以下、アスリハ）の指導およびサポートを行っている。アスリハとは競技復帰に向けたリハビリテーションのことを指す。したがって、本学RCRでは患部に対する単純なりハビリテーションの実施だけでなく、各競技特性に配慮したプログラムを提供し、必要に応じて全身の機能改善や患部外の強化も図り、より円滑な競技復帰に貢献出来るよう心掛けている。その他、状況に応じてテーピングを施したり、医療機関の紹介などを行うこともある。

b. 学生トレーナー教育

本学には教員としてATが4名在籍しており、RCRにおける現場実習を担当している。具体的な実習内容として外傷・障害の予防、スポーツ現場における救急処置、測定と評価、コンディショニング、アスリハ、組織の運営、教育などがあげられ日本体育協会が推奨する教育内容を実践している¹⁾。

対象学生は、学生トレーナー部CARE（Community of Athletic training and Reconditioning Expertsの略）に所属し、部活動の一環として活動をしている約30名と、CAREには所属していないが授業の一環として実習に参加をしている約10名の計40名程度である。いずれもATの資格取得を目指し、日頃の学習成果をより実践に近い実習という場で発揮している。

以上のようにRCRはアスリートをサポートするという側面とATを養成する教育的な側面の2つを合わせ持っている。

Ⅲ. 来室状況

2015年4月から2016年3月までの1年間にRCRを来室した学生アスリートの総数は553名（男性463名、女性90名）であった。また、月別に分類すると6月が最も多く146名（男性109名、女性37名）、次いで7月が113名（男性89名、女性24名）で、5月が80名（男性64名、女性16名）であった（図1）。

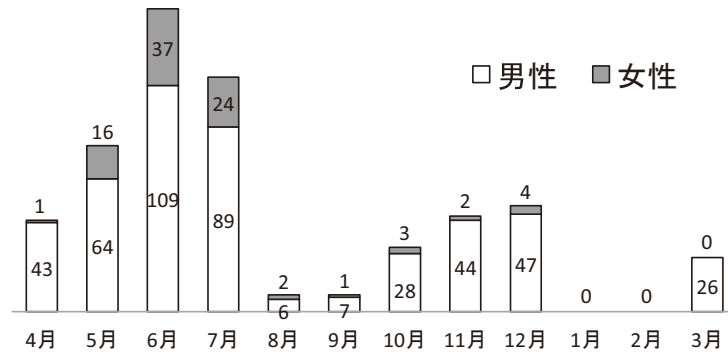


図1 月別来室者数

新規来室者の総数は71名（男性58名、女性13名）であり、学年別で見ると1年生が27名、2年生が21名、3年生が20名、4年生が3名であった（表1）。また、これらを外傷と障害に分類すると外傷が49名（69%）、障害が22名（31%）であった（図2）。

表1 学年別新規来室者数

	男	女	合計
1年生	21	6	27
2年生	19	2	21
3年生	17	3	20
4年生	1	2	3
全学年	58	13	71

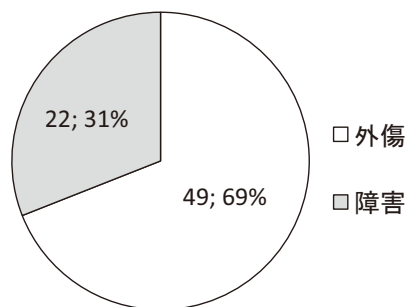


図2 新規来室時における外傷・障害の分類（件数；割合）

続いて、外傷・障害発生部位を上肢、下肢、体幹に分類し、手・手関節、肘関節、肩関節、足・足関節、下腿部、膝関節、大腿部、股関節、腰部、頸部に細分化した。その結果、下肢が最も多く、なかでも膝関節が25%、次いで肩が18%、大腿部が17%であった（図3）。

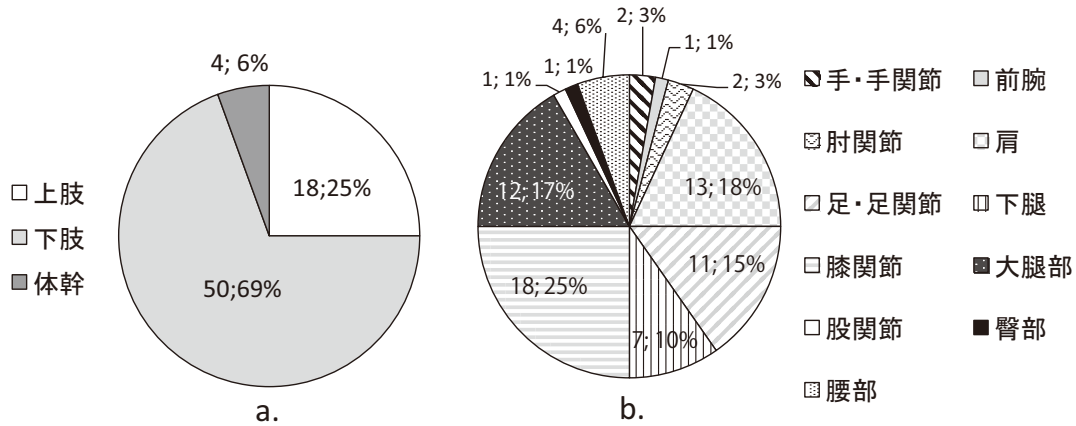


図3 新規来室時における外傷・障害の部位（件数；割合）

a. 上肢、下肢、体幹に分類

b. 手・手関節、前腕、肘関節、肩、足・足関節、下腿、膝関節、大腿部、股関節、臀部、腰部に分類

最後に、RCRへの来室目的として最も多いものはアスレチックリハビリテーションの実施で51%、次いでコンディショニングが22%であった（図4）。

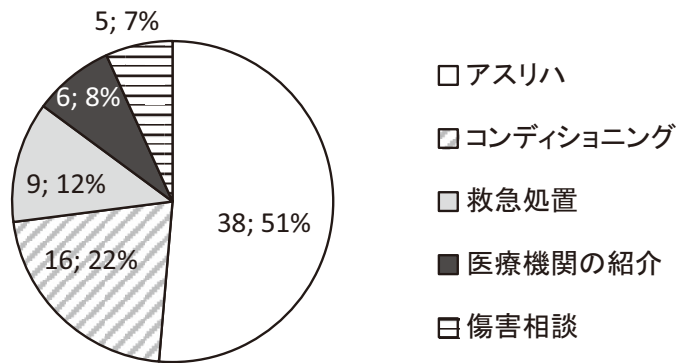


図4 新規来室時における来室目的（件数；割合）

IV. 活動報告

a. アスリートサポート

アスリートサポートとしての活動は、アスリハの指導が中心となっている。原則として、RCRにおけるアスリハは医師の指示のもと決定されたプログラムを実施し、適時AT教員がプログラム内容を更新している。いずれにしても医療機関内のみでなく、スポーツ現場におけるアスリハの実施も医師の医学的な判断を基に進行する必要がある²⁾。したがって、本学RCRでは競技復帰に向けたアスリハの対象を医療機関において医師の診断を受けたものとしている。この取り決めは、プログラムエラーによる不利益からアスリートの身を守るだけではなく、トレーナー自身のリスク管理としても非常に重要な事柄である。また、夏季および春季休暇期間中のRCRの利用は完全予約制となっているため、休暇期間にまたがってアスリハを行う場合は、長期休暇前にセルフコンディショニングについても指導を行うことが多かった。その他、傷害予防も含めたコンディショニング指導や患部外に対する強化トレーニング、テーピングなども行った。

b. 学生トレーナー教育

学生トレーナーは主にアスリートが来室した際に問診なども含めた情報収集、各種の検査・測定、アスリハ実施時などにおけるエクササイズ指導、外傷・障害に対する救急処置などを行う。AT教員はこれらのすべてに対して、学生トレーナーに指示ならびに指導をし、実践的な実習を行った。特に検査・測定においては正確性、エクササイズ指導についてはリスク管理、そして救急処置については迅速かつ適切な判断など、社会に出た際に即戦力となり得るよう、よりスポーツ現場に即した指導を心掛けた。なお、本実習活動はATの資格取得のために日本体育協会から定められた養成カリキュラムのひとつである。

V. 今後の展望

本学には多くのアスリートが在学しており、クラブ活動も非常に盛んである。これに伴い我々ATにはより質の高いアスリートサポートが求められる。今後更にRCR活動の成果を高めるためには、各クラブ部との情報共有をより活発に行い、多くの学生アスリートを受け入れられる体制やスムーズな競技復帰を可能にするシステムの構築が必要であると考えられた。具体的には、一度により多くのアスリートを受け入れることや競技復帰間近のアスリハにも対応出来るよう、RCRの拡充などが有効であると示唆された。

トレーナー教育においても、更なるレベルアップを目指し、周囲の医療機関との連携による充実したバックアップ体制作りなども検討していく必要がある。もう一点、ここ数年で実習を受ける学生が増加しているという現状がある。この点に関しては、教員から提供する教育の質が低下しないよう、より良い教育方法を検討し続けることが必須である。

以上のように、RCRが本学アスリートの競技力向上ならびにAT教育に、より一層貢献できるよう、様々な方法を模索していく必要がある。加えて、本学RCRの取り組みが、今後のアスレティックトレーニングの発展に貢献出来るように努めていきたいと思う。

参考文献

- 1) 山本利春：アスレティックトレーナーの任務と役割，河野一郎（監修），公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト1 アスレティックトレーナーの役割，財団法人日本体育協会，第1版，2007，pp29-31
- 2) 小林寛和：アスレティックリハビリテーションの概要，河野一郎（監修），公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト7 アスレティックリハビリテーション，財団法人日本体育協会，第1版，2007，pp11

生涯学習研究センターでは、論文募集を年1回行う。

論文の投稿手続きは、右図をご参照ください。

1. 発行

九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学生涯学習研究センター（以下「センター」という）の紀要として生涯学習に関連する研究成果を発表するため、論文募集を年に1回おこない、3月末日を発行日とする。

2. 投稿資格

本紀要の投稿資格者は、①本学教育職員、②本学の非常勤講師、③前述以外の者で本紀要編集委員会が特に認めた者とする。

3. 掲載形態

招待論文、総説、原著（実践研究を含む）、書評に分けて掲載する。よって、著者は前もってその形態を明示する。

4. 編集

1) 紀要の編集・発行のために編集委員会（以下「委員会」という）を設ける。

委員会は、センターの運営委員会並びに兼任教育職員から各大学が1名を選出し、委員長はセンターの所長をもってあてる。

2) 投稿論文は査読をおこなうこととし、委員長が指名した査読者に対して委員長名で依頼する。

3) 委員会は査読結果に基づき、投稿論文の掲載の可否を決定する。

5. 執筆要項

1) 原稿内容は、未刊行のものに限る。

2) 原稿内容は、センターで学ぶ人など多くの人理解できるように、極力専門用語を避け、平易な文章で作成する。

3) 言語は、日本語（原則として常用漢字、現代仮名遣い、算用数字を使用）又は英語とする。

4) 原稿用紙は、A4版の縦置き横書きを原則とし、Microsoft Wordで作成した文書とする。

5) 投稿原稿は、図表・注記・参考文献等を含め、1頁あたり40字×40行の一段組で原則とし、フォントサイズ10.5ptで作成し10枚以内とする。

6) 投稿原稿1枚目には、和文タイトル・著者名・所属・欧文タイトル・欧文著者名・欧文所属を掲載する。なお、原著（実践研究を含む）の場合は、その後に欧文アブストラクト（300語以内）を加える。

7) 欧文アブストラクトは、必要に応じて欧文に精通している者が点検済みのものを提出する。

8) 注は、本文の末尾または参考文献の前に一括して入れ、本文中の該当箇所の右肩に1)、2)のように番号を付す。

9) 参考文献は、必要があればまとめて注の後に番号を付けて列挙する。なお、注及び参考文献は、原則として、著者名、論文名、書名、雑誌名、発行所、巻数、出版年、頁の順に記す。

10) 本文見出し番号の打ち方は、次のとおりとする。なお、大きい見出しには1行あける。

I、II、III、……

1、2、3、……

(1)、(2)、(3)……

①、②、③、……

a、b、c、……

11) 投稿原稿は完成原稿とし、校正は3校を原則とする。なお、校正は必要最小限の訂正・修正にとどめ、改行、改ページにわたる修正は認めない。

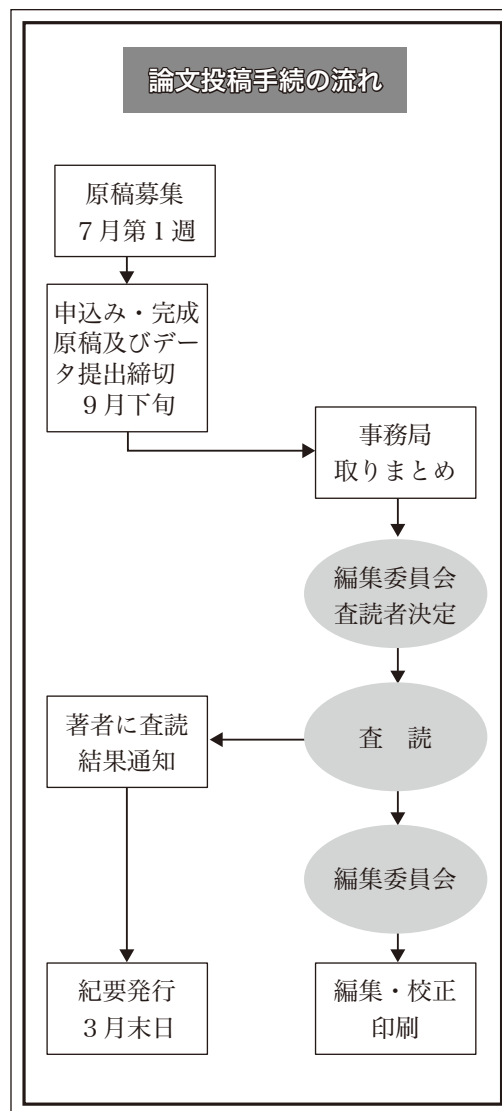
6. 原稿の受付と締切り

1) 原稿の募集案内は、毎年度7月第1週とする。

2) 投稿原稿の申込締切りは指定された9月下旬とし、同時に執筆要領に沿って執筆された完成原稿及びデータをセンターに提出する。

7. 「複製権」「公衆送信権」の行使委託承認について

執筆者は、投稿にあたり、研究紀要公開のために紀要原稿に関する「複製権」「公衆送信権」の行使を生涯学習研究センターが指定する機関・業者に委託することを承認することを前提とする。



九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学
生涯学習研究センター紀要 第22号

編集委員会

《 委員長 Chairman 》

篠原 純司

生涯学習研究センター 所長
九州共立大学スポーツ学部 准教授

Junji SHINOHARA
Director, The inter University Lifelong Learning Research Institute
Associate Professor,
Department of Sports Science, Faculty of Sports Science,
Kyushu Kyoritsu University

《 委員 Committee Member's 》

栗谷 健礼

九州共立大学スポーツ学部 講師

Takenori AWATANI
Lecturer, Department of Sports Science, Faculty of Sports Science,
Kyushu Kyoritsu University

河原木 有二

九州女子大学共通教育機構 准教授

Yuji Kawaragi
Associate Professor,
Department of Human Development, Faculty of Humanities,
Kyushu Women's University

松本 禎明

九州女子短期大学子ども健康学科 教授

Yoshiaki Matsumoto
Professor, Department of Childhood Care and Education,
Kyushu Women's Junior College

制作協力者：生涯学習研究センター職員
Assistants to the Editor

The Inter-University Lifelong Learning Research Institute staff

〒807-8585 北九州市八幡西区自由ヶ丘 1-8
九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学

生涯学習研究センター

TEL& FAX 093-691-6550 E-mail longlife@kwuc.ac.jp
<http://www.kwuc.ac.jp/longlife/>

投稿に関する規約等は紀要の最終ページに記載されている
本時の記事内容に関しての責任と著作権は著者に帰属する

平成29年3月31日印刷

平成29年3月31日発行

九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学
生涯学習研究センター紀要 第22号

発行者 九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学
生涯学習研究センター

〒807-8585 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-8
TEL&FAX(093)691-6550

印刷所 有限会社 秀文社印刷

〒804-0013 北九州市戸畑区境川二丁目3-3
TEL(093)883-1234

KYUSHU KYORITSU UNIVERSITY・KYUSHU WOMEN'S UNIVERSITY
KYUSHU WOMEN'S JUNIOR COLLEGE

BULLETIN OF THE INTER-UNIVERSITY LIFELONG LEARNING RESEARCH INSTITUTE

No.22

INDEX

■ REVIEW PAPER ■

- A Case of Continuation possibility for Farm management Fumihiko USHIJIMA 1
— Lifelong learning and Local promotion —

■ ORIGINAL ARTICLES ■

- Chinese cultural experience program at Shanghai Ocean University Keiko OGIHARA 9
—Mutual Learning of Chinese Students and Japanese Students as The Lifelong Learning Activity— HUANG DONG BAI
- The present situations and problems of the family support to Yoshiaki MATSUMOTO21
Alternating Hemiplegia of Childhood (AHC) patients
- Current Status and Issues of Cooperation Methods with Medical Institutions... Takenori AWATANI29
in The Kyushu Kyoritsu University Reconditioning Room
Junji SHINOHARA
Yasutaka TATUMI
Nana NAKAMURA
- Practical Research of Athletic Ability Measurements Takenori AWATANI35
in Flag Football Japan National Team
Akinori NAGATA
- Reporting of 2015 reconditioning room activities Yasutaka TATSUMI41
and future prospects at The Kyushu Kyoritsu University
Junji SHINOHARA
Takenori AWATANI
Nana NAKAMURA

2017年